最新國文讀本

巻一

375.9
Sa19
資料室

41683
教科書文庫
4
810
41-1933
200030
1601

資料室
375.9
Se19

文部省檢定濟
昭和八年十二月二十七日・中學校國語漢文科用
昭和九年一月二十九日・實業學校國語科用

文學博士 佐佐木信綱
文學博士 武田祐吉 編

最新國文讀本

湯川弘文社

和田英作筆

暁の富士

広島大学
教育学部
22342

最新國文讀本　卷一

目次

一　日本　一
二　櫻　六
三　爽やかな心　河野省三　一一
四　千里の春　大和田建樹　二二
五　ロンドンに於ける東宮殿下　二荒芳德　二八
六　皇軍の精神　東郷平八郎　三八

七 戰機熟す　水野廣德　四二
八 新綠の奈良　荻原井泉水　五三
九 朝の鳥　高濱虛子　六一
一〇 緋絨の鎧　杉村楚人冠　六六
一一 水郷夏趣　野邊地天馬　七四
一二 エヂソン傳　下位春吉　八六
一三 トレビーゾにて　牧野英一　九二
一四 北極線を越えて　吉村冬彥　一〇〇
一五 眞夏の海　一〇二
一六 七月の星座

一七 森の英雄　薄田泣菫　一一一
一八 夏日短信　芥川龍之介　一一五
一九 運動二題　一一八
一 相撲　下田次郎　一一八
二 マラソン　松村武雄　一二〇
二〇 レイニーア山の氷河　小島烏水　一二三
二一 壺と提灯　〔鳩翁道話〕　一三〇
二二 伊能忠敬　幸田露伴　一三八
二三 四季小品　德富蘆花　一四六
二四 讀書の樂み　〔益軒十訓〕　一五二

二五 白虎隊 一五七
〔自修文〕
一 子犬 長谷川二葉亭 一六〇
二 手品 國木田獨歩 一七二
三 歸省 笹川臨風 一八三
附錄
主要象形文字表
國語假名遣表

東京大學圖書之印

最新國文讀本 卷一

高嶺 タカネ。
朝 アシタ。
黃海 朝鮮半島・濟州島・揚子江河口北端に圍まるゝ海面。
碧玉を溶かす

一 日本

波間を分けて昇る旭日に、富士の高嶺は眞紅に輝いてゐる。この朝、太平洋を越えて、故國に近づいて來た船には、その氣高い姿を仰ぐ感激の聲ばかりが滿ちてゐる。

支那大陸から、濁りに濁つた黃海を航して、歸り來る船も、對馬海峽に入るに及んで、はじめて洗はれた思を成す。碧玉を溶かしたかと疑はれる海水は、日光を受けて、波のしぶ

明媚　メイビ。山水の景色の美しきこと。

瑞西　Swiss スイス。歐洲中部にある共和國。

國體

きさへ紫にうち煙る。島ある處、老松は岩に懸つて、この歸朝者を喜び迎へるやうである。

美しい日本。風光明媚なこの國に生れ出た我等の幸福を想ふ。

富士山の如き美しい山は、世界に多く類は無い。瀬戸内海の如き麗しい海は、他に多く比を見ない。しかし風景の美しいだけが日本の全部では無いのだ。景色の佳い國ならば、外にも無いとは云へない。高山と湖水とに惠まれ、世界の公園と呼ばれてゐる瑞西の如き、その尤なるものであらう。日本の尊い所以は、實にその國體にあるのだ。その歴史にあるのだ。

覘ふ　ネラふ。

文化

上に萬世一系の天皇を戴き、萬民皆兄弟の如く一致協同してゐるこの國體こそは、世界に比類が無いのだ。古代以來、我が國を覘つて、侵略して來る外敵もあつたが、未だ嘗て一度も汚されたことの無い歴史が尊いのである。

かやうに萬國にすぐれた國體を戴き、かやうに世界に類の無い歴史に育てられて來たのが、我等日本人である。我等日本人は、祖先以來この國を守り續けて來たのである。

平和なる外來者に對しては、何處までもこれを迎へて、その文化や知識を吸收すべきは勿論であるが、兵力や思想で我等を侵して來る者に對しては、協力してこれと戰ひこれを退けて、光輝ある我等の歴史を保つて行かなければなら

祖國　祖先以來所屬せる國。本國。

目に見えない敵

萬朶　バンダ。數多の枝。

旗章　キシャウ。旗じるし。

ない。我等はあらゆる意味で我等の祖國を守らなければならない。

まづ身體や精神を一層健全にせよ。

中學の時代こそは、人の一生に取つて、身體や精神を鍛錬すべき重要なる時代なのだ。目に見える敵、目に見えない敵に對して、よく正邪を區別し、大敵をも恐れず、光輝ある日本の歷史を傳へ行くべき基礎は、この時代に作られるのである。

今や陽春四月、萬朶の花は到る處に咲き滿ちてゐる。この花こそは我等が精神の旗章だ。朝日に輝く日章旗、この旗こそは、我等が意氣の旗章だ。

漲る　ミナギる。

棲息　セイソク。

我等は日本人である。

日本の國は美しい。しかしこの美しい國に居る間だけが日本人なのでは無い。場合によつては、この國を出て、海外に雄飛をする。黃塵天に漲る支那大陸も、毒蛇や猛獸の棲息する赤道直下も、我等が活動の舞臺として、絕好の樂土である。而して世界の何處の果に行つても、我等は日本人なのだ。光輝ある日本の歷史を祖先から分けて貰つてゐる日本人なのだ。

この歷史を汚さないやうな強い日本人になるのが我等の任務である。

二　櫻

街にも、園にも、野にも、山にも、花の咲き滿ちる時が來ました。この花の時に因んで、言葉の花に歌はれた櫻花について、述べようと思ひます。

賀茂眞淵の歌に、

うら〳〵とのどけき春の心よりにほひいでたる山ざくら花

長閑かな春の心から生れ出て、春の魂ともいふべきは櫻花であります。かういふ櫻花を以てつゝまれた我が日本の春を樂しむ我等は、その幸をたゝへ、櫻花を禮讚せずには

因む　言葉の花　和歌のことをいふ。

賀茂眞淵　通稱は岡部衞士。國學四大人の一人。明和六年歿。年七十三。（一三五七―二四二九）

禮讚　ライサン。

居られません。

吹く風をなこその關と思へども道もせにちる山櫻かな。

これは、源義家が、奥州征伐の途上の作であります。元來義家は、勇猛な武將でありまして、梁塵祕抄によつて傳へられた歌謠にも、

鷲の住む深山には　なべての鳥はすむものか
同じき源氏と申せども　八幡太郎は恐ろしや

と、恐れられた武將であります。しかもその一面に、かういふ軍旅の途次に和歌を詠ずるといふやうな、やさしい心持もあつたのです。しかして、奥州に多くの關はあつたが、勿

なこそ　勿來。茨城縣多賀郡に關址あり。

源義家　頼義の長子。鎭守府將軍。天仁元年歿。年六十八。（一七〇一―一七六八）

梁塵祕抄　十卷。一部分現存す。平安時代の歌謠を集めたるもの。後白河天皇の御撰。

餘德

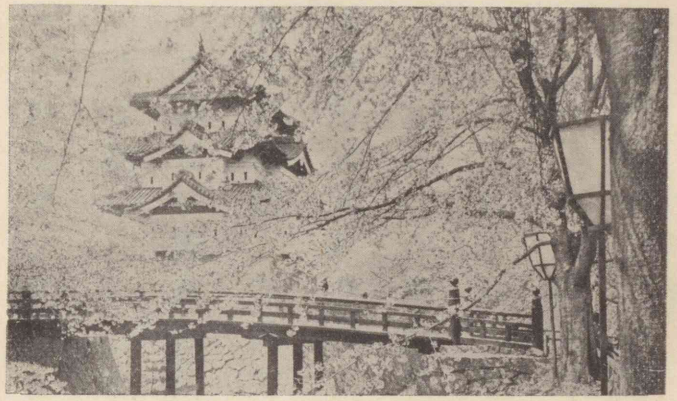
西行法師
俗名は佐藤義清。歌僧。建久元年歿。年七十三。（一七七八―一八五〇）

人間味

來の關だけが此の一首によつて名所となり、數百年の後の旅人がその跡を訪ふのも、歌の餘德といへませう。

花も散り人も都へかへりなば山さびしくやならむとすらむ

これは、西行法師の歌であります。



城下の櫻

うき世をよそにふりすてゝ山にこもり、自然を心の友とした清い胸の底に、かういふゆたかな人間味があつたのであります。

長慶天皇
第九十八代。

をさまらぬ世のひとごとのしげければ櫻かざしてくらす日もなし

これは、吉野朝の長慶天皇の御製で、花の名所である吉野山におはしながら、櫻を折りかざして遊ばせ給ふ一日だになかつた事を思ひ奉ると、涙のこぼれる御歌であります。

高殿の窓てふ窓をあけさせて四方の櫻のさかりをぞ見る

明治天皇の御製であります。いかにも雄大で、眞に帝王の大御歌であります。古より今にいたるまで、花を見るといふ題の歌は數しれずありますが、これほど大きい歌はありませぬ。而してこれは、明治四十五年の御製であります

五箇條の御誓文
明治元年三月十四日、天皇が紫宸殿に御して神祇に誓ひ給ひし御誓文。
一　廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ
一　上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ
一　官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス
一　舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ
一　智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ

が、かの明治元年、天皇が祖宗の神靈に誓はせ給うた五箇條の御誓文の一なる「廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ」また「智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ」といふ遠大なる思し召から起つて、明治の四十五年間に、國威が世界に輝きわたるやうになつた御成果が、自ら花を見るといふ此の御製に歌はれたものと考へられます。もし明治時代をあらはした一首の歌をあげよといふならば、私はこの「高殿の窓てふ窓を」といふ御製を擧げたいと思ひます。

朝日影とよさかのぼる日の本のやまとの國の春のあけぼの

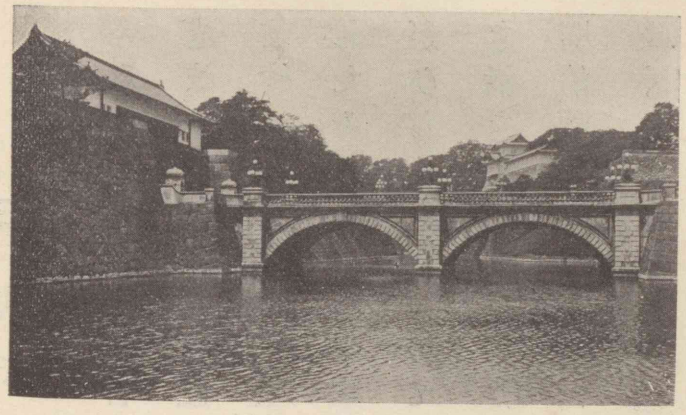
（佐久良東雄）

明治神宮
東京市澁谷區にあり。官幣大社。明治天皇・昭憲皇太后を奉祀す。

三　爽やかな心

私どもは、晴れた日に、東海の天に聳える富士山の姿を仰ぎますと、何となく麗しい崇高な氣分に打たれるのであります。また朝日に映る山櫻の姿を眺めますと、自然に晴々したみやびやかな氣分になるのであります。日の丸の旗がひら〳〵と飜つてゐるのを見ますと、そこに活動的な活き活きとした氣分が起つてくるのであります。或はまた明治神宮に參拜いたしまして、神宮橋を渡り、白木のお鳥居をくゞり、清淨な參道を吸ひ込まれるやうに進んで、清い水で手を洗つて御社殿の前に參りますと、自ら清々しい尊い

氣分につゝまれてくるのであります。更にまた松の綠の滴るお濠の前に立ちまして、我が皇室の御繁榮を思ひますと、なんともいへぬ神聖な氣分が現れてくるのであります。



ニ重橋

これ等の神々しい、淸々しい、晴々しい心持こそ、實に我々日本人が、遠い遠い昔から養つて來た心の眞の姿であります。建國以來、私どもの祖先が育てあげて來た純眞なる心は、全く我が國民性の本質でありまして、所謂大和魂の眞髓

所謂イハユル。眞髓シンズヰ。

であります。かゝるさつぱりとした、廣い、しかも力强い氣分の充ち滿ちた心が、卽ち本當の眞心でありまして、この眞心から出るこれ等の氣分こそ、最もよく人生を美化し、私たちの生活を幸福に導くものであります。

明治天皇の御製に、

さし昇る朝日のごとく爽やかに持たまほしきは心なりけり

と、お詠み遊ばされてありますが、その爽やかな心は、取りも直さずかやうな純眞な氣分に外ならぬのであります。私どもがこの世に於て毎日々々の生活を營むに當りましても、最も必要な氣分であり、且價値のある態度は、誠にこの爽

持たまほし

やかな心にあります。

この爽やかな心は、晴々しい廣い心持であります。徒に物に屈託しない、ゆつたりとした心であり、又濫りに他を排斥しない、穩かな心であります。この心からして、偏りのない爽やかな氣分を味はふことが出來るのであります。爽やかな心は、明快な裏表のない心持であります。溫味のある、生々とした生活は、世の中で最も望ましい生活であります。僞らない正直な態度は、最も力强い生活であります。宗教の生命も亦こゝにあると信じますが、天眞爛漫は卽ち爽やかな心の本體であります。

爽やかな心は、かく淸らかで、溫味のある、生き〳〵とした

屈託　クツタク。

天眞爛漫

心持でありまして、建設的に、有意義に、總ての物を生かしてゆく所の積極的精神であります。所謂「朝日の豐榮昇る」氣分が、卽ちこの爽やかなる心の働であります。

我々日本人は、かういふ爽やかな心を根柢としまして、この尊い國體を築き上げ、この立派なる國民道德を形造つて來たのであります。我が國民精神の現れである神道は、卽ちこの爽やかな心を以て、その根本としてゐるのであります。神道については色々の說がありますが、畢竟はこの爽やかな心、純眞な氣分に生きる所の日本人の生活の原理で、日本民族の傳統的信念であると思ひます。

この神道の精神を最もよく看破した一人は、今から百五

建設的

朝日の豐榮昇る　朝日が美しく榮え昇ること。

傳統的信念

本居宣長
國學四大人の一人、伊勢松坂の人。享和元年歿。年七十二。（一二三九〇―一二四六一）

十年前に、伊勢の國松坂にあつて、天下の學界を風靡した本邦空前の大學者本居宣長でありますが、その本居宣長の詠んだ有名な歌に、

敷島のやまと心を人問はゞ朝日ににほふ山ざくら花

といふのがありますが、この大和心も正しくこの爽やかな心の姿をたゝへたものであります。宣長は全生命を捧げて、この大和心の眞髄を發揮すべく努力した人であります。力を極めて、この日本人のもつてゐる心の本來の姿に存するところの感情の麗しさ、眞心の尊さを說いた人であります。さうして、ひたすらに我が皇室を崇め、我が國家を愛する道を力強く主張した人であります。

嫌味

朝日に匂ふ山ざくら花は、如何にも清らかであり、さうして單純にさつぱりした眺であります。嫌味とか毒々しいとかいふところのない、清いみやびやかな姿であります。そこに私ども日本人としての心の特色が表れてゐるのであります。我々日本人の祖先は、かういふ心持を、明く淨く正しく直き心とも申しまして、道德の根柢となる心はこゝにあると信じて居つたのであります。

かゝる爽やかな大和心を本質とする神道は、たゞこのみやびやかな心を心として、一途に我が皇室を尊び、我が國家を愛して來たのでありますから、神道の信仰が人性の自然

に存してゐることは明かであります。神社は我が神道を形に生かした表現でありまして、彼の鳥居といひ、鎭守の森といひ、氏神の御社といひ、何れも皆淸淨簡素といふことを尊んでゐます。そこにお詣りいたしますと、私たちの心は、自ら淸々しい爽やかな氣分になつてしまふのであります。殊に、五十鈴川の淸い流のほとりに、二千年の昔から鎭座まします皇大神宮に詣りますと、何人も古歌に歌はれてゐるやうに、

何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに
涙こぼるゝ

といふ感じに打たれるのであります。この何とはなしに

簡素

五十鈴川　三重縣にあり。皇大神宮の傍を流るゝ川。

感ぜられる尊い心が、卽ち日本人の神に對するありのまゝの姿で、最も氣品の高い宗教的の情操であります。

明治天皇の御製の中にも、

淺みどり澄みわたりたる大空のひろきをおのが心ともがな

といふ御歌がありますが、この氣分をもつてゐることが大切な心がけであります。この御詠を拜誦しますと、いかにも淸らかに爽やかな大御心を偲び奉らざるを得ないのであります。

思へば、まう二十年の昔になりますが、私は明治天皇に因み奉る一つの挿話をもつて居ります。それは明治天皇の

情操

御一年祭の行はれた時のことでした。或小さい田舍町の小學校の庭で、町民の遙拜式が行はれました。伏見桃山の方に向つて祭壇を設け、ほどよく隔つた處に竝びました老若男女は、その町長を首として、一同桃山の御陵を遙拜したのであります。

桃山の御陵　明治天皇の御陵。京都市伏見區桃山町にあり。

その式に列つた町民たちは、何れも靜かに榊葉の立つ祭壇の前に至つて、恭しく遙拜しては立去りましたが、その中に年の頃は五十歳位の八百屋さんがありました。つゝましやかに祭壇の前に立つて、伏拜みましたが、やがて徐に、左の小脇から綺麗に束ねた一束の生薑を取出しまして、丁寧に祭壇に捧げて置いて、一歩退いて一禮して立去つたので

生薑　シヤウガ。

あります。これを目擊しました私は、誠に涙ぐましい感にうたれたのであります。

皆さん、我々日本人の心の底には、かういふ飾り氣のない、單純であつて、しかも淸らかな大和心がたゝへられてゐるのであります。私たちは、この心を日々の生活にうつしまして、物を淸らかにし、心を爽やかにして、僞らざる力强い社會を築いてゆきたいものであります。私はこの爽やかな心を基礎とした生活を、常に快活にして眞面目なる態度と申して居りますが、日本人の氣分と態度とは、どこまでも快活にして眞面目なところに、一番よく眞價を發揮するものであると信じます。

（河野省三）

河野省三　文學博士。國學者。國學院大學教授。埼玉縣の人。明治十五年生。

四　千里の春

春晴千里、山また山、水また水、近き水は澄みて山の綠を浮べ、遠き山は霞みて水と共に藍を流す。此の間に一線を引くものは何ぞ。一列の汽車、今や東京より東海道を下りつつあるなり。海に面して窓に倚る客、鉛筆と紙とを手にして寫し出せるは、歌か詩か、抑〻畫か。

七砲臺のあたり、波穩かにして、高く低く群れ飛ぶ鷗、落花の風に翻るに似たり。帆を半ば張りて出で行く船あり。艪を操りて横ぎる船あり。房・總二州の山々は霞に消えて、探れども見えず。松青き處、色どり添ふるに桃の紅なるを

東海道　東京より京都に至る街道。

七砲臺　東京灣内品川沖にありし七個所の砲臺。

房・總　安房・上總の二國。千葉縣の一部をなす。

以てす。藤澤の野、山北の谷、人毎にたゞ美しと叫ぶ。

三保の松原烟り渡りて、春は畫の如し。磯に碎けて折れ返る波、波路の末に浮立つ雲、何物か造化の妙筆に漏れん。近き舟は行けども、遠き帆影は動かんともせず。杳として認めらるゝは伊豆なるべし。富士は水彩色もて描かれたるが如く、窓の右に立ち、又左に顯る。

平原十里、見渡す限り、麥は綠に菜花は黄なり。熱田の社を左に拜みて、春風に吹かれ行けば、名古屋の城は、金の鯱の光に紛はぬ影を見せ初めたり。

彦根去り、草津來り、烟は早くも瀨田川に横たはりて、京都も近くなりぬ。朝日將軍の遺跡も、今は何れの處ぞ。霞に

山北　神奈川縣足柄上郡川村の大字。東海道線の驛。

三保の松原　靜岡縣清水市にあり。

造化　自然。

杳として　はるかに。

熱田の社　熱田神宮。名古屋市にあり。官幣大社。草薙の劍を奉祀す。

草津　滋賀縣栗太郡にある町。

朝日將軍　木曾義仲。壽永三年（一八四四）粟津に戰死す。

鳰の浦　ニホのウラ。琵琶湖をいふ。

粟津　大津市膳所町にあり。

山紫に水明か　山水の景色の美しさをいふ。

現　ウツツ。

躑躅　ツツジ。

如意が嶽　東山の一峰。俗に大文字山といふ。

疊まるゝ遠近の山影、或は淡く或は濃く、鳰の浦風波に眠りて、粟津の松原獨り昔に似たり。

東山の翠は我を迎へて笑ひ、賀茂川の流は我を迎へて歌ふ。懷かしき故郷の母に會ふに似たるは、何時も京都に著きし時の心地なり。

山紫に水明かなる處、たゞ夢の如く現の如く、三條を渡り四條を渡ること日に幾度ぞ。躑躅を柴に折りそへて、戴き連れたる大原女も、何時しか我が友となれる如し。如意が嶽より吹來る春風は、輕く袖を拂ひ、又、絲長き堤の柳を吹く。

類無き晴天は、花の如き少女を誘ひて、西へ東へと群れ行かしむ。さし續けたる日傘は、橋の欄干と共に、水に影を落

清水　キヨミヅ。清水寺。京都市東山區にあり。眞言宗の寺。

蕨餅　ワラビモチ。

東寺　京都市下京區にあり。眞言宗の寺。

御室　オムロ。仁和寺をいふ。京都市右京區にあり。眞言宗の寺。

せり。花に誘はれて佛に詣で、佛に導かれて花を見る客、今日も清水觀音の堂前を滿たしぬ。舞臺を廻りて咲誇る花、恰も一幅の畫の如し。姥は此の間に立ちて、「蕨餅召せ。」など呼ぶ。眺め渡せば、淺黃に藍に霞み渡れる八幡・山崎の邊も面白きに、東寺の塔を松の間に墨がきにせる筆の力こそ巧なれ。

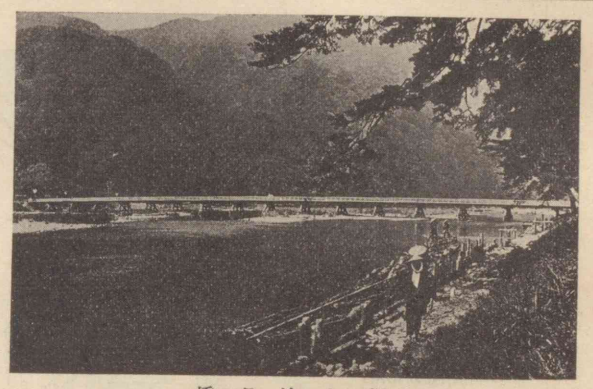
西山の花見る人は、多く先づ御室を指す。松青く樓門赤

香雲

かゞよふ　かゞやくに同じ。

く、茶烟絶え〳〵に揚りて、花極めて白し。塔は霞を漏れて松風の外に聳え、鐘樓は昔を說きて香雲のうちに包まる。讀經の聲遠く響きて、鶯の歌長へに高き梢にあり。

重なる岩根を踏みしめて生ひたつ松、其の間を點綴して咲誇る花、嵐山の春こそ今闌なれ。小舟に乘りて漕ぎゆく人あり。岸の此方にて眺むる人あり。一筋の渡月橋は錦の如き袂を載せて、此の大堰川を横ぎる。水清く岩を洗ひて玉と碎け、山白く烟を離れて空にかゞよふ處、此の美



嵐山渡月橋

大悲閣　右京區嵐山にあり。千手觀音をまつる。

柳櫻を云々　古今集、素性法師の歌に、「見わたせば柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりける。」とあるによる。

廣隆寺　右京區太秦にあり。眞言宗の寺。

大和田建樹　國文學者。高等師範學校・女子高等師範學校教授に歷任す。愛媛縣の人。明治四十四年歿。年五十四。

は彼の美と相映じて、自然の彩色を爲す。坂を登りて大悲閣に至れば、眼下に廣げらるゝ一幅の圖、柳・櫻をこきまぜて、恰も錦を織出だせる如く、又、友禪を染め成せる如し。

途に太秦を過ぎて廣隆寺を訪ふ。夕陽靜かに鐘樓の瓦を染めて、春、物寂し。茶店あれども客來らず。少女は落花を風に任せて眠り、兒童は仁王門に紙礫を打附けて去る。

暮色は東山を繞り、漸く賀茂川に襲ひ來れり。清水の塔も半ば隱れぬ。紫に紅に藍に墨に、見る〳〵彩られ行く山影、薄く濃く靑く黑く消され行く人影、詩中の物ならぬは無し。天地たゞ平和にして、四望たゞ寂寞たり。顧みれば西山も無く、北山も有らず。

（大和田建樹―雪月花）

ロンドン　London 英國の首府。
東宮殿下　今上天皇。
五月十一日　大正十年。
バッキンガム王宮　Buckingham Palace 英國首都ロンドンにあり。皇帝御在住の王宮。
英國皇太子　ジョージ五世の第一王子。
鹵簿　ロボ。
閑院宮　載仁親王。元帥陸軍大將。
ギルドホール　Guildhall 公會堂の名。

五　ロンドンに於ける東宮殿下

五月十一日午前十一時、我が東宮殿下にはバッキンガム王宮御出門、陸軍御正裝で、英國皇太子殿下と御同乘、公式鹵簿を以て、ロンドン市役所の歡迎會に台臨になつた。閑院宮殿下を初め、供奉員一同も隨伴した。王宮から會場であるギルドホールに至る里餘の間、市民が沿道に堵列して御歡迎申上げる有樣は、御入京の時に比して更に熱烈を加へ、殿下は全く御答禮にお遑がないほどであつた。

抑〻この市役所の歡迎會ぐらゐ、在留邦人及び供奉員の心に深刻强烈な緊張を與へたものは、御外遊中他にその例が

環視　クワンシ。とりまきてみること。
遂行　スヰカウ。

バッキンガム王宮

なかつた。それは實にこの日こそ、我が東宮殿下が初めて英國國民環視の中心にならせられることであり、また殿下としては、御生涯の中に初めて一千名に近い外國知名の人の面前で、御歡迎の辭をお受けになるからである。

一在留邦人は、その前日、我々に向つて、「東宮殿下はギルドホールで十分その御大任を御遂行になつて下さればよ

九重の雲

顫ふ　フルふ。

いが……」と、頗る心配氣に話した。この言葉は殿下に對してまことに失禮のやうではあるが、しかし、我々の敬愛して措かない東宮殿下が、しかも九重の雲の奥深く生ひ立ち給ひ、御年漸く二十一歳に渡らせられる殿下が、今まで全く御經驗のない晴の場所であるこのギルドホールにお立ちになる前に、誰がその御演説について、將又その御態度について、憂慮なしに考へることが出來よう。畏れ多いことではあるが、假に殿下の御音聲が低くてホール全體に通らなかつたとしたら、假にその御態度がいつになく御落著がなかつたとしたら、假にお聲が顫へたとしたら、……我々お側近く奉仕するものは、そんなことは到底ないとは信じてゐるものゝ、それでも多少の興奮を禁じ得なかつたのである。

古色を帶ぶ

まして、殿下の御性格を十分に知らず、またお親しみ申上げる機會の甚だ少かつたこの一在留邦人が心配したところは、恐らく日本國民一般の憂慮であつたに相違なからう。しかも、これは何も國際的または政策的に考へて、殿下の御態度を心配するのではなく、たゞ「自國の殿下がどうか御立派にやつて下されればよいが……」といふ、自他の觀念を超越した心の奥から込上げて來る自然の叫であつたのである。

當日の歡迎會は最も改まつた公式のものであつた。古色を帶びた公會堂のうちには、隙間もなく來會者が著席してゐた。殿下が御入室になると、「君が代」が奏せられ、會衆は

連綿　長くつらなりて絶えざること。
頁　Page ページ。

ギルドホールにおける東宮殿下

一齊に起立して殿下を奉迎した。

殿下は市長の御案内で、供奉員一同を隨へさせられ、會衆の間を靜々と御通過になり、數段高い演壇上に設けられてある御席にお著きになつた。市長夫妻その他吏員の大禮服の古風な服裝は、連綿たる歷史の頁を貫いて今日に至つたものであるといふ。それは我々に羨しいほどの憧れを感じさせた。御席は演壇上の前端に一つ離れて設けられ、その後に市長夫妻の椅子があり、更にその後に英國側の皇族・貴賓の席と、日本側の高官及び供奉員の席とが設けられてあつた。

憧れ　アコガれ。

お伴の者が殿下に續いて所定の座席に著くと、會衆は漸く腰を下した。さすがに大國民である。私語する者もなく、齊しく靜肅に殿下をお見上げ申してゐた。我々は實に一種形容することの出來ない崇高さを覺えた。

殿下はたゞお一人、孤立した御席に、頗る御沈著な御態度で嚴然と椅子にお倚りになつてゐた。この時、我々は何とも言へぬ嬉しさを感じた。「おゝ、お立派な御態度だ。」と、感歎

するとともに、我に歸つて在留邦人の會衆の一團を見ると、皆緊張した氣分を漲らせて、殿下の御英姿をお見上げ申してゐた。

やがて市長は、恭しく殿下の御前に進んで、歡迎文を朗讀した。次いで、殿下はお起ちになつて、演壇の前端までお進み遊ばされ、徐に會衆一同にお目をお配りになり、輕いお會釋の後、まづ前立のある陸軍御正帽を左腋下にお挾み遊ばされ、陸軍正規の鹿革の厚いお手袋を左手にお穿ちになつたまゝ、御答辭の草稿の卷紙をお開きになつた。處が、用紙が厚い爲に、それをお開きになると、二回までも紙の撚が元に戻つて、甚しく御面倒のやうに拜せられた。我々はこれ

朗讀 ラウドク。
會釋 エシヤク。
撚 ヨリ。

を拜して、腋下に御帽子をお挾み遊ばされてゐるだけに、さぞお扱ひにくいことであらうと、胸を轟かせながらお見上げ申してゐたが、殿下は益〻お落著になり、二回三回とよくその紙をお引延べ遊ばして、音吐朗々と、しかも諧調のある抑揚を以て御演說遊ばされた。その間、滿場は眞に水を打つたやうな靜肅さで、會衆は殿下の響き渡るお聲を醉ふやうに伺つてゐた。御演說が濟むと、會衆は一齊に拍手して、暫しは鳴りもやまなかつた。あゝ、この時の印象は、眞に一生涯忘れることが出來ないであらう。これを感激と名づけるのさへあまりに限定的に、あまりに說明的になる虞がある。たゞ云ひ知れぬ涙が知らず〳〵泉のやうに眼底に湧

音吐 抑揚
虞 オソレ。

那須與一宗高　源義經の臣。

屋島の戰　壽永四年（一八四五）二月屋島（香川縣）に於ける源平兩軍の合戰。

番へる　ツガへる。

くのを覺えた。會衆の日本人の群を見返ると、皆喜悅の笑顔といふよりは、寧ろ感謝の念に包まれたといふやうな顔附をしてゐた。

ロンドン郊外御散策中の東宮殿下

我々は後で、あの那須與一宗高が屋島の戰で、敵の舷頭に揭げてある日の丸の扇を射るために、靜々と馬を波間に乘入れ、矢を番へて將に放たうとしたその刹那の味方の心持、さては首尾よく扇の要を射貫いた時の味方の心持は、この際我が

二荒芳德　伯爵。貴族院議員。明治十九年生。御外遊に宮內書記官として供奉せり。

東宮殿下が御答辭案をお手にして、お起ちになつてから、御演說をお終へになるまでの我々日本人の心持と丁度同じであつたらうと、畏れ多いことながら、ふと感じたのであつた。

（二荒芳德—皇太子殿下御外遊記）

今上陛下御製

山色新
山やまの色はあらたにみゆれども我がまつりごといかにかあるらむ

朝海
天地の神にぞいのる朝なぎの海のごとくに波立たぬ世を

日本海海戰　明治三十八年（一九〇五）五月二十七日より翌二十八日にわたる日本海沖の島附近より鬱陵島附近に亙りて行はれし日露大海戰。

六　皇軍の精神

大元帥陛下の御稜威と、將卒の忠勇と、國を擧げての愛國心とに由り、海戰史上空前の大捷を得たる日本海海戰も、既に二十餘年の昔となりましたが、追憶すると、當年激戰の狀歷々として今なほ目前に見る心地が致します。この戰役に於て、露國軍人の態度を觀るに、弱いどころか、寧ろ强兵と云ひ得る程でありました。然るに皇軍と戰うて連敗したのは、どういふ理由からであつたで

東郷元帥

假令タトヒ。　敢然カンゼン。　大義に殉ず

せう。

惟ふに彼等の多數は、戰爭なるものを、軍隊若しくは軍艦としての任務だと信じて居るものゝやうであります。隨つて勝敗を決することも、軍隊若しくは軍艦の存在を限度とし、これが敗れた場合には、最早軍人としての自己の任務は終つたものと思惟し、例外はありませうが、其の上の個人的奮鬪を續ける精神が少いやうであります。これが皇軍に敵し得なかつた大原因だと私は考へて居ります。處で改めて言ふまでもありませんが、皇國軍人にありましては、一隊一艦としてのみでなく、假令一兵となつても、苟も一人たりとも生存してをる間は、敢然として盡忠の大義に殉じ、

以て本分を完うしようとする覺悟は鐵石よりも堅いのであります。

殊に忘れられないのは、此の海戰に於て生命を君國に捧げた戰友のことで、皇軍を無窮に守護しつゝある其等の英靈は、勿論今も嚴として、我々の行動を監視して居らるゝでありませう。

扨、私共が本分を盡す上に於ては、平時と戰時との區別はございませぬ。輕重もございませぬ。何時如何なる場合に於ても、唯々至誠を以て一貫すべきのみで、他を顧みる必要は、更にあるまいと思ひます。斯くて我が軍艦旗をして、益〻光輝を放たしむると同時に、世界平和の保障たらしめて

保障　ホシヤウ。

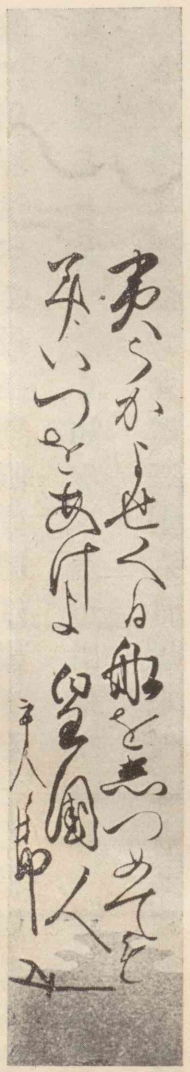
顏　カンバセ。

夷らかよせくる船をしつめてもみいつをあけよ　皇國人　平八郎

澎湃　ハウハイ。波のさかまくさま。

東郷平八郎　元帥海軍大將。伯爵。鹿兒島縣の人。弘化四年二月生。

こそ、此の海戰に、或は生命を捧げ、或は傷ついた僚友たちに、始めて向ける顏があると思ひます。それと共に今一つ忘れてならぬことは、當時國民諸君が、義勇奉公の大精神を活現して、燃えるが如き熱誠を示された一事でありまして、出



東郷元帥筆蹟

征して居た當時は勿論、今より回顧しましても、眞に心強い感が湧き起ります。私は此の大精神は、澎湃として永久に漲り、以て御國の守護たるべきものと確信致します。

（東郷平八郎―愛國讀本による）

五月十四日　明治三十八年。
安南　Annam　佛領印度支那の東北部
ホンコーヘ灣　Honkohe Bay

追躡　ツヰデフ。後を追ひかける。

七　戰機熟す

露國の第二・第三艦隊が五月十四日を以て安南なるホンコーヘ灣を發してから、まう十餘日になる。彼等が朝鮮海峽に出現すべき最長期限は將に盡きんとして居るが、その動靜は杳として全く知ることが出來ない。

假裝巡洋艦信濃丸は、二十六日以來、僚艦と共に、南方の哨艦として、敵艦隊の來航を警戒して居た。

二十七日午前三時三十分、信濃丸は、朝鮮海峽に向つて進む一汽船を發見した。「それ」と、信濃丸は直ちに速力を增して、臨檢の爲、之を追躡した。漸く近づくに及んで、朧に霞む

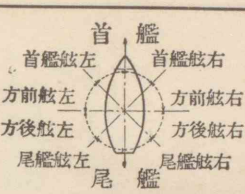
ヘーグ條約　和蘭のヘーグ(Hague)に於ける平和會議の條約。

成川艦長　名は揆。當時大佐。

夜間鏡　ナイトグラス。Night-glass

月光に透して見れば、三檣二煙突の大汽船、しかも檣頭に連揭した白紅白の區別燈。これ疑もなく、敵の病院船だ。如何にヘーグ條約に依り、病院船は中立不可侵とは云へ、單船孤行、我が海面に乘入るとは、あまりに大膽奇怪なる行爲である。必ずや他に同行の優力な艦隊があらうと、成川艦長は、夜間鏡を取つて八方を注視したが、海尙昏く他に一隻の船影だに認めない。いで、此の上は、たとひ病院船であつても、苟も我が行動を偵知せんとする疑ある以上は、此のまゝ通過を許すべきでないと、益〻船を進めた。彼我の距離約三百米に近づいた頃、彼は我を以て味方と誤つたものか、電燈信號を以て我に對して信號を始めた。時に東天僅かに白

軍艦方位



舳艫相銜む　ヂクロアヒフクむ。船が多く連ること。

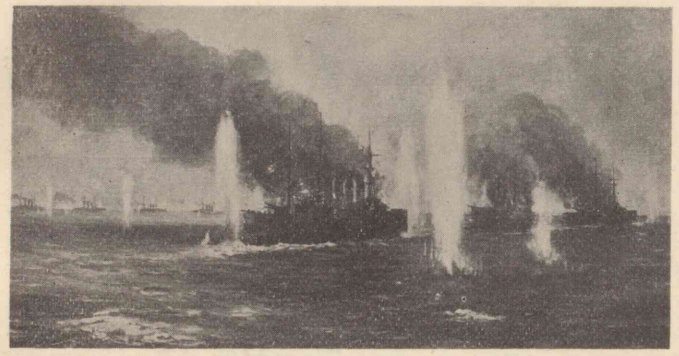
不知不識

絶體絶命

んで、朧に敵甲板上の物影を辨じ得るに至つた。信濃丸は臨檢の爲、已にボート卸し方の準備を整へ、將に敵に向つて停船の命を降さうとした一刹那、不圖前方を見渡せば、右舷艦首より左舷後方に亙り、大小の軍艦數十隻舳艫相銜んで連城の如く竝んで居るのを發見した。近きは其の距離僅かに一千米に過ぎない。信濃丸は、今や不知不識の間に、敵艦隊の列中に突入して居たのである。進むも敵、退くも敵、嚢中の鼠か、釜中の魚か、絶體絶命。一度敵に認められれば、萬死あつて一生なきの境遇である。

此の時艦橋に立てる成川艦長は、泰然として部下の將校に告げて曰く、

長官　東郷聯合艦隊司令長官。



海戰　古島松之助筆

「不幸にして此の窮地に陥る。唯運を天命に委して全力を以て脱出を試み、若し能はずんば敵の一艦を衝撃して共に沈むのみである。獨り冀ふ所は敵艦隊の出現をば、我が長官に報ずる餘裕を得たいことである。若し此の報告にして、一度長官の許に達するを得ば、哨艦としての我等の任務は已に果したといふべきである。假令、敵彈に沈むとも、亦遺憾とする所でない。併し我送信を開始すれば、敵之を妨害するは必然である。艦の浮べる限り、電

萬難を排す

轉舵　テンダ。船の方向をかへることをいふ。

耄す

濛氣

信機の作用する限り、萬難を排して報告に努めよ。」と。

斯くて信濃丸は轉舵一杯、全速力を以て退却すると同時に、無線電信機に火花を散らして、敵艦隊出現の警報を四方に傳へた。時正に午前四時四十分である。

然るに、敵は徹宵の警戒に視力衰へたか、連日の憂悶に心神耄したか、毫も信濃丸の接近を知らざるものゝ如く、敢へて追擊するの狀なきのみならず、我が無線電信の通信をさへ妨げなかつた。若し此の時、敵の快速巡洋艦にして信濃丸を追擊せんか、速力僅かに十五海里の同艦は、到底脫出の途はなかつたのである。又若し敵にして信濃丸の無線電信を妨害せんか、當日の如き濛氣深き日に於て、其の後何れ

悚然　ショウゼン。おそれるさま。

五島　長崎縣に屬す。佐世保の西方に列なる島。

愁眉を開く

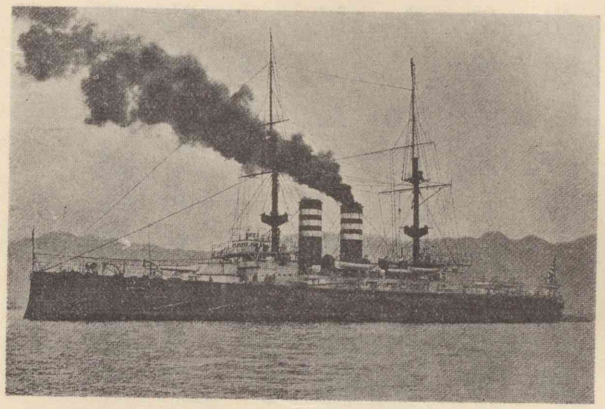
前日　五月二十六日。

の哨艦、何れの望樓が、果して能く敵を發見して之を我が艦隊に通報し得たであらうか。之を想へば、轉た悚然として肌の寒きを禁じ得ない。日本海大海戰の帷幕は、實に此の時に開かれたものである。

戰機は一瞬の早きを尙ぶ。朝鮮海峽まで僅かに六十海里、五島の北西三十海里の地點に達しても、日本艦隊の片影をさへ認めなかつた露國艦隊は、漸く愁眉を開いた。然るに何ぞ知らん。信濃丸の無線電信は、虛空を飛んで敵艦隊出現の警報を傳へ、出動中の我が哨艦、竝びに根據地に在る艦隊は、各〻豫定の戰策に從ひ行動を開始したのだ。

前日來、哨艦として特に五島の北方に派遣せられてゐた

巡洋艦和泉は、直ちに敵と接觸を保たんが爲、其の速力鈍く、備砲弱きにも拘らず、敢然敵艦隊に向つて急進した。已にして午前七時頃に至り、和泉は五島の北西約三十五海里の地點に於て、前方遙かに長城の連るが如き敵の全艦隊を發見した。敵は和泉の近づくのを見ると、直ちに其の巨砲を之に向けて、寄らば擊たんと構へて居る。此の日濛氣密にして眼界狹く、展望僅かに五六海里に過ぎない。故に敵と確實なる接觸を保つ爲には、是非とも其の著彈距



笠　三

石田艦長
名は一郎。當時大佐。

離以内に近づかねばならぬ。此の時和泉は、敵を距ること僅かに八九千米、敵の巨砲一度彈を吐けば、和泉の運命、憂ふべきものがある。

然るに、石田艦長は、「我が艦隊中、今獨り敵と接觸を保持してゐる我が艦が、若し敵を避くれば、他に敵艦隊の動靜を我が主力艦隊に報ずるものはない。假令和泉一隻を失ふとも、斷じて敵と離るべきにあらず。」と、目に餘る敵の大艦隊を左舷に望んで、平然艦を進めつゝ、敵の勢力、陣形より速力・針路に至る迄、刻々無線電信を以て、我が主力艦隊に通報した。和泉の行動は、大膽と云はうか、不敵と云はうか。敵味方等しく賞讃し措かざる所である。

宇久島　平戸島の西にあり。
東水道　壹岐と對馬との中間の海面。
沖の島　對馬の東方にあり。
洪波

艨艟　モウドウ。軍艦をいふ。

一方東郷司令長官は、哨艦和泉の報告に依つて、敵艦が五島・宇久島の北西約二十五海里に在つて、東水道に向つて進航しつゝあることを知つた。而して敵艦隊の速力を十二海里と推定し、敵を沖の島附近に邀へ擊たんと決心して、行く行く戰鬪準備を整へつゝ、洪波を蹴つて沖の島へ向つた。彼我の艦隊は刻々相近づく。

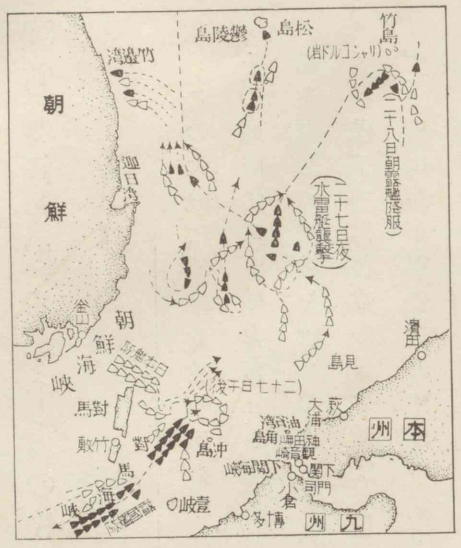
午後一時四十分になつて、我が主力艦隊は左舷南方數海里にあたり、始めて濛氣を破つて進み來る敵の全艦隊を發見した。大小合はせて三十餘隻の艨艟が、大戰鬪旗を檣頭に飜しつゝ、北々東の針路を執つて眞一文字に進航して來るのである。

睥睨　ヘイゲイ。

東郷大將は、參謀長以下の幕僚を率ゐ、三笠の前艦橋に立つて敵艦隊を睥睨してゐたが、之を見ると直ちに各艦に戰鬪準備を命じた。

おゝ、見よ。旗艦三笠の檣頭高く颯と翻つた一連の信號！

「皇國の興廢此の一戰に在り、各員一層奮勵努力せよ。」



日本海海戰隊形圖

嚴として秋霜の如き信號を見て、將士の意氣は彌が上にも昂つた。彼等が報國の赤心は、旭日の戰鬪旗とその色を競ひ、彼等が決心の一念は、鋼鐵の裝甲よりも尙堅かつた。

兩虎嵎を負ふ
雙龍雲を捲く

水野廣德
豫備海軍大佐。日本海海戰當時海軍大尉。第四十一水雷艇長。愛媛縣の人。明治十年生。

戰機は刻々に熟して來た。互に滿を持して放たぬ狀は、まさに兩虎嵎を負うて相對し、雙龍雲を捲いて相向ふともいふべきであらう。搏擊の機は刻々に逼つて、將卒は肉を躍らし汗を握る。千古の偉觀である。曠世の壯觀である。

（水野廣德—此一戰による）

この大戰に於ける敵の兵力、われと大差あるにあらず、敵の將卒も亦その祖國の爲に極力奮鬪したるを認む。しかもわが聯合艦隊が、よく勝を制して奇績を收め得たるものは、一に、天皇陛下の御稜威の致す所にして、もとより人爲の能くすべきにあらず。殊にわが軍の損失、死傷の僅少なりしは、歷代神靈の加護に依るものと信ずる外なく、嚮に敵に對して勇戰したりし麾下將卒も、皆この成果を見るに及びて、唯感激してその言ふところを知らざるものゝ如し。

（東鄕聯合艦隊司令長官公報）

天壤無窮

八　新緑の奈良

奈良はいつ來ても好いが、殊に新緑の頃が好い。　櫻の頃に來た時には、まだ黄いろく枯れたまゝであつた芝は、生き生きと青んで、鹿がその上に寢ころんだり、又その青い芽をたべたりしてゐた。

猿澤の池の柳は、萌黄色をした其の若々しい美しさが、稍〻老いて、こんもりと葉を茂らしつゝ水に映つてゐた。　春によく來る團體の客のざわめきも今はなくて、池の緣にあるベンチには、木蔭を求めて子供を遊ばせてゐる女がゐるばかりだつた。

萌黄色　青と黄との間の色。
ざわめき
ベンチ　Bench

ホテル
Hotel　旅館。

興福寺
法相宗の大本山。藤原氏の氏寺として盛大を極めたりき。

荒池のほとりはなほ靜かだつた。奈良ホテルに沿うて、葉櫻のほの暗いほどの小徑を歩くのも好かつた。池には遠くの興福寺の塔の影が映つてゐた。其の水に石を投げて水の輪が出來るのに興じる子供たちもゐた。一つの輪が廣がつてそれが消えてゆくのを待つては、他の子供が石を投げるのであつた。

梅の木が林をなしてゐる處では、園丁が其の枝をおろしてゐた。芝の上に落ちた青葉には、鹿が寄つて來て香を嗅いでゐた。

鷺の池のほとりには、躑躅が燃えるやうに咲いてゐた。ボートを浮べて漕ぎ廻つてゐる人達があつて、水の光も夏

パラソル
Parasol 日傘。

あせび
馬酔木。石南科に屬する常綠灌木。

らしかつた。浮見堂に足を休めてゐると、水を渡る風が快く訪れる。

春日神社社頭

嫩草山・高圓山がそれぞれにこんもりとして輝いてゐた。高畑のからりとした芝生の上には、大きな花が咲いたやうに、美しいパラソルが動いてゐた。

あせびの花は大抵すが影が出來て、こまかく洩れてゐたが、其の花の多い谷のやうになつた路には美しいひそんでゐる光の戯れも面白

春日の社　春日神社。官幣大社。武甕槌命・經津主命・天兒屋根命・比賣命を奉祀す。

せびる

鹿子斑　カノコマダラ。

かつた。

春日の社に近い杉の木立は、夏らしく黒み渡つて、その葉の先から愛らしい淺綠の爪のやうな若葉が出てゐた。參詣の人の多く通る道には、鹿が澤山待受けてゐた。私は煎餅を、手に持つてゐるだけ、皆與へてしまつたが、彼等は圓々とした可愛い眼を私に向けて、いつまでもせびるやうに蹤いて來た。一つの鹿は私の前で首を上げたり下げたりした。それは御時儀なのだつた。私はおとなしく私の前に脚を折つてゐる鹿の背を、犬にでもするやうに撫でてやつた。文字通り鹿子斑の其の肌はつや〳〵しかつた。五月は毛竝の光澤の一番美しい時だといふ事である。ぬけ換

南大門　東大寺の總門。

大佛殿　東大寺の金堂。東大寺は華嚴宗の大本山。

つてまだ間もない角は、やつとY字形になつたばかりで、赤みを帶びて、柔かさうだつた。手に握つてみると、其の赤い色の血のぬくみが感じられた。

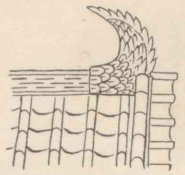
南大門の通りには燕が澤山飛んでゐた。そこらに佇んでゐる鹿の細く高い脚の間を、すり拔けるかと思ふやうに飛んだり、角細工などの土產物を竝べてゐる店の軒に、ついと飛入つたりしてゐた。

大佛殿を左へ、松林の間を行く路の感じも好かつた。草が長く伸びるまゝになつてゐる向うに、實に古い堂が見え

猿澤の池

戒壇院　東大寺に屬す。僧に戒を授けるために設けた壇のある堂。

鴟尾　シビ。



轉害門　天平年間（聖武天皇の御代）の建築といふ。

る。それは戒壇院らしかつた。顧みると大佛殿の屋上の鴟尾が金光燦爛として松の間に高く聳えて、松の梢には蟬がじい〳〵と鳴きはじめてゐた。

春日野

轉害門は、奈良に殘つてゐる建築のうちでも最も古いものの一つであるが、その簡素にして雄大な結構は、すばらしいものだと思つた。私は其の門をはひつて大佛殿の裏を歩いた。竹がわつさりと路に垂れてゐたり、柿の若葉が日を照りか

きんぽうげ　金鳳花。うまのあしがたの一名。毛茛科に屬する多年生草本。

木の芽　山椒の若葉をいふ。

トンネル　Tunnel　隧道。

へしてゐたりした。古い寺院の土塀が崩れた事によつて、却つて繪畫的に見えるやうな、淋しいひそつりとした道だつた。築地のすそにはきんぽうげが咲き、白い小さい蝶が休んでゐた。

嫩草山の前の茶亭で晝飯をたべた。木の芽の吸物を出した。嫩草山と春日山との間にある谿の道は、若葉の綠が顏にうつるやうな、朗かな感じの處だつた。爪先上りに苦しくないほどの登りになつて、山の奥に踏込んでゆく。洞の楓といふ名のついてゐる通りに、楓がトンネルのやうになつてをり、高い木には藤があちらにもこちらにも咲き垂れてゐた。奈良は藤の花の多い處だが、公園の茶亭のそれ

などは大方すがれてしまつてゐるのに、こゝだけはまだふさふさとした紫を垂れて美しかつた。歩けばさすがに暑さをおぼえる。道に沿うて綺麗な流があり、流に臨んで古風な亭がある。そこに私は腰をおろした。青いかまきりの子が、若い芒の葉先にとまつてふら〳〵としてゐた。奈良の若葉はいゝなと、私は今更のやうに思つた。

私は綠の深い中を縫ひながら、あてもなく歩いた。

（荻原井泉水―觀音巡禮）

落ちざまに水こぼしけり花椿　芭蕉

椿落ちてきのふの雨をこぼしけり　蕪村

かまきり　螳螂。直翅類に屬する昆蟲。

荻原井泉水　名は藤吉。俳人。東京帝國大學出身。東京市の人。明治十七年生。

九　朝の鳥

寢床を出て、楊枝をつかひながら、湖水の見える部屋に往つて見る。

朝日が部屋一面にはひつて居る。湖水と思はれる邊は雲ばかりで、なにも見えぬ。富士の頂上から雲海を見おろしたのと似た景色だ。部屋の下は東谷になつて居るので、我が眼より、稍〻高く、稍〻低く、無數の杉の梢が、鉾のやうに突つ立つてゐる。左手には、北谷の向うに當る峯が、鋸の齒のやうな杉を背にならべて、湖の方に流れて居る。空氣が清い上にも清いので、近景の杉の梢も、遠景の杉の森も、新鮮な色

湖水　琵琶湖をさす。

雲海　ウンカイ。

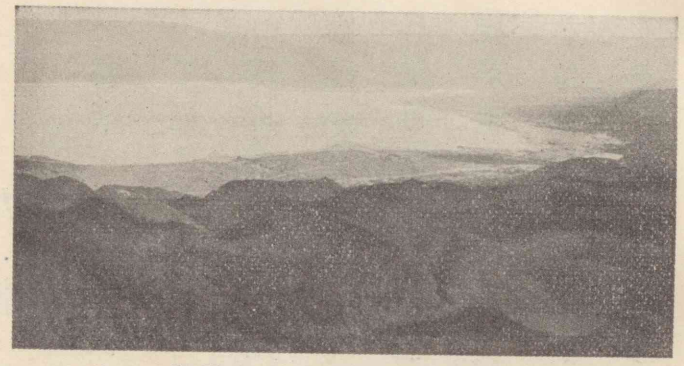
東谷・北谷　比叡山延暦寺内の一部の稱。

浮世

わが物顔

をしてゐる。さうして、その間を、薄い霞が流れて居る。非常に靜かだ。自分の呼吸の外、浮世の物音は何も聞えぬ。

たゞ此の天地をわが物顔に啼き囀つてゐるのは小鳥だ。何といふ可愛い聲であらう。名がわからないのが殘念だ。そこの杉の梢で、一羽啼いてゐる。あそこの杉の梢で他の一羽が答へてゐる。また遙か向うの谷深く、他の一羽が應じてゐる。よく耳を澄ますと、なほ二三羽の聲がどこかで聞えるやうだ。また其



比叡山より見たる琵琶湖

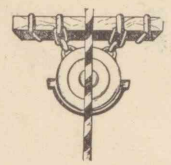
凛々しい
りりしい。

空山

錯綜

山鳥

の小鳥の合奏を破るやうに、他の聲の小鳥が、突然その間に高音を張る。前の小鳥ほど優しい聲ではないが、又凛々しいところがあつて、其の音の空山に響く趣が何とも云へぬ。これも名のわからぬのが殘念だ。それも一羽ではない。三羽・四羽と聞くうちに、だん〳〵殖えてくる。前の小鳥が縱絲なら、此の小鳥は横絲のやうに、互に錯綜して、能く調和を保つところが面白い。突然けん〳〵とけたゝましい音が谷を横ぎる。此方の谷にも響けば、彼方の峯にも響く。昨日聞いた雉子の聲よりも稍〻急調だ。多分山鳥ででもあらうか。前の二つの小鳥で織り成した美しい絹を、たゞ一聲で引裂いたかと疑はれる。



鰐口

啄木鳥
キツツキ。攀木類に屬する鳥。

暫くして、その聲は谷の底の底、峯の奥の奥に浸みこんでしまつて、そのあとは元の靜けさになる。眞先にその靜けさを破るものは鶯の聲だ。絹におかれた絣のやうに美しい。一つの絣が置かれると、又縱絲を織つて、前の小鳥が啼く。又横絲を織つて、次の小鳥が啼く。絣が啼く。縱絲が啼く。横絲が啼く。此の美しい絹を、又山鳥の聲が破るのかと思ひながら、待設けて居ると、不思議な聲が別に起る。それは麓の里の池で聽く蛙の聲に能く似てゐて、谷の寺院の鰐口が口をあけて呟くのかとも疑はれる。他の鳥の聲聲が皆高調で、晴れ〳〵とした中に、ひとり低調で、不平らしい音を出すのが面白い。友は「啄木鳥だらう。」といひ、他の者

山鳩

高濱虚子
名は清。俳人。愛媛縣の人。明治七年生。

は「山鳩だらう。」と云つた。

琵琶湖の上には、まだ漠々とした白雲が漂うてゐる。杉の梢を流れる霞は、少しづつ薄らいで來て、だん〳〵と谷が深く見えて來る。

（高濱虚子―新寫生文）

夏さむき淺間が嶽のふもと原雲ひくくおりてと
ぶ鳥もなし
白かしの若葉にこもる村はづれ家ゐは見えず簇
の音聞ゆ
法の師に法の道きき馬おひに馬のことき今日
の旅かな

一〇　緋縅の鎧

落合直文

緋縅の鎧をつけて太刀はきて見ばやとぞおもふ山ざくらばな

父君よ今日はいかにと手をつきて問ふ子を見れば死なれざりけり

正岡子規

くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春の雨ふる

瓶にさす藤の花ぶさみじかければ疊のうへにとゞかざりけり

落合直文
號は萩の舍。國文學者。歌人。宮城縣の人。文久元年生。明治三十六年歿。年四十三。

正岡子規
名は常規。俳人。歌人。愛媛縣の人。明治三十五年歿。年三十六。

伊藤左千夫

病みふせるわが枕邊にはこび來る鉢の牡丹の花ゆれやまず

しばらくを三間うちぬきて夜ごと〳〵子らがあそぶに家わきかへる

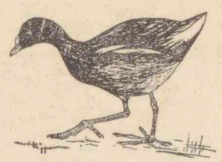
波は疊の上にのぼりぬ。人も牛もにがしやりて、水の中に獨り夜を守る庵の寂しさに、こほろぎの音を聞きてよめる歌。

牀のうへ水こえたれば夜もすがら屋根の裏べにこほろぎの鳴く

さ夜ふけて訪ひよる人の水音に軒のこほろぎ聲なきやみぬ

伊藤左千夫
名は幸次郎。歌人。千葉縣の人。大正二年歿。年五十。

波は云々
明治三十三年、東京地方の洪水。



ばん　鷸。涉禽類に屬す。

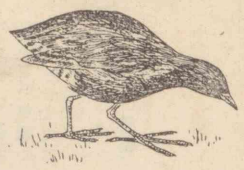
ごゐさぎ　五位鷺。涉禽類に屬す。

くひな　水鷄。涉禽類に屬す。

一一　水郷夏趣

水郷の夏、眞菰の茂りに小舟を乘り入れると、水鳥がぱつと飛び立つ。ばん・ごゐさぎ・くひな・かいつぶり・よしきりの類。

眞菰の根方、水とすれ〳〵の處に、盂蘭盆の精靈棚のやうに草を編み合せた鳥の巣が、彼方にも此方にも浮いてゐる。これが水の增減に任せて、自ら高くもなれば低くもなる。巣の上には程よく草の葉がかぶさつて、一寸鳥の巣とは見えぬが、此の草の葉を取除けると、其の下に小さな卵が十箇許り列んでゐる。水鳥の卵だけに、卵が水につかつてゐる。



かいつぶり　鵜鷀。游禽類に屬す。

よしきり　行行子。燕雀類に屬す。

かいつぶりとよしきりとのだと、人が教へてくれた。

眞夜中にふと目を覺すと、靜寂のうちに鎖された天地の中に、星屑の瞬く外は、この世に生動してゐるものゝ、何一つあるとも覺えぬところに、ひゆら、ひゆら、ひゆらと細い、悲しげな聲で、かいつぶりの鳴く聲が水の上から傳はる。遠く近く、東に西に、何處を何處とも定めなく鳴く音の聞えるのは、人影一つ見えぬ湖の闇に、此の世を我が世と許り飛び交してゐるものと見える。かいつぶりの鳴く音

水郷　石山太柏筆

眞菰　禾本科に屬する多年生草本。
盂蘭盆　ウラボン。七月十五日の佛事をいふ。普通省略して、單にボンと稱す。
精靈棚　シヤウリヤウダナ。
シヒレー　Percy Bysshe Shelley 英國の詩人。（一七九二―一八二二）
スカイラーク　Skylark 雲雀。

を聞くのは闇がよい。

かいつぶりの聲が闇によくば、よしきりの聲を聽くのは、月明の夜が相應しい。晝間は少し煩いが、夜月明に湖水の水が庭の松が枝をくゞつて見ゆる時、靜かによしきりの聲を聽いてをれば、如何にも心ののびやかなるを覺える。これが卵を生み、雛を孵すやうになると、はたと鳴を靜めて、何處にゐるか分らなくなる。

シェレーが雲雀の鳴く音に擬したスカイラークの詩を學んで、よしきりの鳴く音を歌つて見ると、まづかうもあらうか。

行行子（ぎやうぎやうし）がなく

布袋葵　ホテイアフヒ。みづあふひ科に屬する一年生草本。
河骨　カウホネ。睡蓮科に屬する多年生草本。
睡蓮　睡蓮科に屬する多年生草本。

行行子が鳴いてるとやうに
行行子がぎようぎようとなく
日すがら夜すがら
水近き眞菰の中
そよ風になびく葦の葉かげに
行行子がぎようぎようとなく
ぎやぎやぎやぎやぎやあ
ぎやぎやぎやぎやぎやあ

夏が至る毎に、湖面に名も知れぬくさ〴〵の草が花を開く。布袋葵の紫や、河骨の黃など、色とり〴〵の花が咲く。野生の睡蓮が、黃がかつた白い花をつける。花は小さいが、

蓴菜　ジユンサイ。睡蓮科に屬する多年生草本。

野生だけに一種の野趣が溢れて愛すべきである。見たことはないが、蓴菜も沼の何處やらに花が咲いてるさうな。水底に生ふる藻が夏は茂つて、水の中を見下すと、澄み切つた水の底一面がさながらの叢となつてゐる。草の冬枯れて夏茂るのは知つてゐるが、水底の藻も冬は枯れて夏茂ることを永い間知らなかつた。この藻屑が肥料になるとて、朝靄の晴れやらぬ頃から、小舟に棹さして、これを引揚げてゐる人の姿も、夏の趣を見せる。

夏の朝、何處を指して何處に行くといふこともなく、小舟を乗りまはす。葦をわけ、眞菰を開き、藻の花に乗り、河骨の上に浮ぶ。夏の夕べ、夕闇の迫る岸の細道をたど〳〵と行

杉村楚人冠　名は廣太郎。東京朝日新聞記者。和歌山市の人。明治五年生。

けば、人もなげに螢がすれ〳〵に飛びかひ、遠くとのみ聞きなした梟が、ほろ〳〵とつい頭の上で鳴く。折ふし野らから歸る頻被り姿の可笑しいのが、すれちがひさま道を讓つて、挨拶して行き過ぎるのも親しげで嬉しい。

（杉村楚人冠―續湖畔吟）

山の鳥いまだ聲せずしのゝめの此の湖ぞひにわ
が一人なる

山村の人すなほなり遇ひて語るどの人もどの人
も皆よき人ぞ

エヂソン Thomas Edison 世界的大發明家。（一八四七―一九三一）

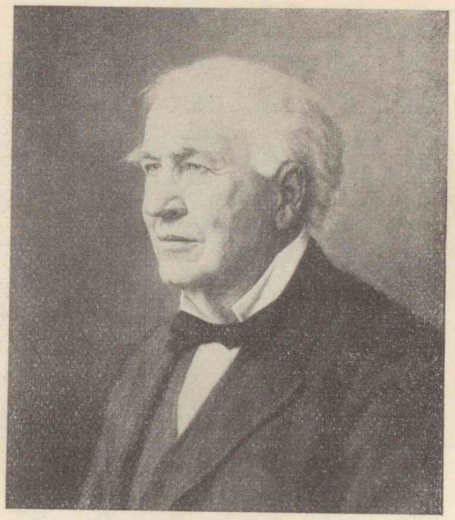
ヒューロン Huron アメリカ合衆國ミシガン州ヒューロン湖畔に在る都會。

サンドヰッチ Sandwich

マッチ Match

一二　エヂソン傳

此處はグランド-トランク鐵道の終點である。汽車は轟然として停車場の構内に入つて來た。驛夫は強い聲を絞つて「ヒューロン、ヒューロン。」と、呼び立てる。「サンドヰッチ、サンドヰッチ。」「煙草にマッチ、煙草にマッチ。」樣々の賣聲が雜然として騷がしく聞える。其の澤山の賣子の中に、賣れ殘りの新聞紙を抱へて居る少年がある。顏の丸い、眼



エヂソン

のぱつちりとした、見るから氣持のよい少年である。此の時、少年は漸く十一歳、健氣にも家計の幾分を助ける爲、列車内の新聞賣子となつて居るのだつた。此の少年こそは實に後の大發明家トーマス-エヂソンだつた。

エヂソンは、小學校では極めて成績が惡く、それに腕白だつたので、教師は其の母に退學を勸めた。負けぬ氣の母は、卽座に彼を退學させて、自ら之を教育した。彼は九歳に過ぎなかつたけれども、母の熱誠によつて、次第に讀書に興味を覺えるやうになり、かうして將來見込のない愚鈍兒と看做された彼の頭腦も啓發され始めたのだつた。

彼が新聞賣子となつた頃、恰も好し、米國は南北戰爭の最

啓發

南北戰爭　西暦一八六一年米國に於て奴隷解放のために起りし戰爭。

大規模

中だつたので、戰況を知らうとする人々は、爭うて新聞を買つた。彼が毎朝抱へて行く大束の新聞は殆ど賣切れる程だつた。そこで、彼は、唯單に賣子をするだけでは面白くない、寧ろ自分で新聞を作つて賣つて見たいと考へて、新聞發行の計畫を立てた。年齡僅かに十五歲の少年に、もとより大規模のものゝ出來よう筈はないが、種々苦心して機械・活字其の他の道具を整へ、これを列車内の一隅に備へ附けて、其處を編輯室とも發行所ともした。

新聞の名は、「グランド・トランク週報」といひ、毎土曜日の發行だつた。幸此の少年記者の新聞は好評を博し、乘客は興味を以てこれを購讀した。彼は此の仕事をしながらも、一

打擊

方母によつて啓發された勉强を止めなかつた。其の編輯所には、電氣に關する書籍や、實驗用の器械を備へ附け、營業の傍、常に研究を怠らなかつた。

處が、意外な打擊が彼の上に落ちて來た。或日、列車内で化學の實驗をしてゐた時、列車の動搖によつて、棚の上に置いてあつた燐素の壜が下に落ち、忽ちにしてそこらは一面の火となつた。彼は驚いて飛び上り、上衣を脫いで消し止めようとしたが、到頭車掌に見附かつた。車掌は怒るまいことか、矢庭に、「此の野郎、途方もない事をする。」と、拳を固めて擲りつけ、機械や活字を手當り次第に投げ棄てた。あはれ、此の椿事の爲に、彼は一耳を傷ひ、週報社は全滅の厄に遇つ

挫折

堅忍不拔

クレメンス驛　アメリカ合衆國ミシガン州デトロイト市の北。

駛る　ハシる。

た。けれども彼は屈しなかつた。彼は失敗の爲に挫折するやうな心弱い少年ではなかつた。再び機械を集め、自宅で新聞の發行を續け、又化學の實驗をも繼續した。此の堅忍不拔の精神は、將來彼をして一千餘種の發明をなさしめたのだつた。

或日、彼は例の通り新聞を賣る爲に列車に乘つた。そしてクレメンス驛に著いた。折しも、「危い、危い。」と、叫ぶけたゝましい聲がする。何事かと驚いて見廻すと、線路の間に小さい子供が遊んで居る。そして、汽車は今疾風のやうに駛つて來る。彼は忽ち身を躍らして其の危地に飛び入り、難なく子供を救ひ上げて、其の父に引渡した。其の父は涙と

緣故

弗　ドル。Dollar 米國貨幣の單位。

共に彼の手を握つて、其の親切を謝した。其の人は電信技師だつた。

此の緣故によつて、彼は、此の技師に就いて電信の技術を習ひ、遂にヒューロン停車場の電信技手に採用され、一箇月二十五弗の俸給を受けることになつた。此の時僅かに十六歳だつた。併し、彼は模範的の技手ではなかつた。彼は當時既に發明家たるべき素質を現し、機械的に動くよりも、寧ろ機械を案出しようとする傾向を有つてゐたので、事務家としては優秀でなかつた。

其の後他に轉任したが、常に品行方正、純潔な青年として成長し、得る所の俸給に餘裕があれば、それで書籍を購うて

益〻研究に努めた。後ボストンのウェスターン・ユニオン會社の技手となり、二十一歳まで留つたが、其の間、電信の速記法を考案し、送信自動器を發明し、國會議事堂などで使用すべき贊否表示器を發明した。

ボストン Boston アメリカ合衆國マサチユセッツ州の首都。

彼は更にニューヨークに行つたが、此の時嚢中一錢の蓄もなく、一人の知己もない巷に、饑と寒さとに苦しみながら、職業を求めて彷徨した。たま〳〵某會社が、窮境に陷つて工場を閉鎖し、其の善後策を講じてゐたので、幾多の職工は、手を空しうして、善い解決のつくのを待つてゐた。これを聞いたエヂソンは、こゝぞ自分の抱負を實現すべき好機會と思ひ、破れ服を纏つたまゝ、大膽にも重役に面會を申込んだ。重役は此の穢らしい青年を見て殆ど狂人視した。けれども、遂に彼の熱心に動かされ、試みに彼を其の難事に當らせることゝなつた。處が、彼の爲す所は極めて剴切で、快刀で亂麻を斷つやうに巧妙に處理したので、忽ち會社を悲境から救ひ出すことが出來た。會社は彼を月俸三百弗で技師に招聘した。これ、彼が名を爲す第一の階段だつた。

善後策

抱負

剴切　ガイセツ。ぴつたりとあてはまること。

昨日は饑寒に苦しんだ一青年、今日は立派な紳士になつた。是に於て彼は再び發明に心を用ひ、先づ新式の印刷機を發明して、米國の印刷界に大なる貢獻をした。これが爲、彼は八萬圓の報酬を得たのだつた。次に彼は同一の電線によつて同時に二重に、更に四重に通信することの出來る

貢獻

電信法を發明し、更に進んで八重通信法をも發明した。此等は、電信に要する銅線や勞力や通信時間等の經濟上、非常に大切な貢獻だつた。更に彼をして一層大ならしめたものは、電話機の完成である。これは從來とても發明されては居たけれども、實用上不完全なものだつた。然るに、今日のやうに自由に通信することの出來る機械を案出した者は、實に彼だつた。

研究室に於けるエヂソン（向つて左）

かやうに發明心に滿ちて居る彼

織維（センヰ。）

寢食を忘る

一大革命

は、更に電燈の發明をも企てた。當時電氣によつて點火する術が知られては居たが、まだ今日使用するやうな電燈はなかつた。其れは電球の製作が發明されて居なかつたからである。そこで、エヂソンは其の發明に苦心し、そして其の材料には日本の扇子の竹の織維が、最も適良であることを發見した。彼は此の研究の爲、四晝夜の間殆ど寢食を忘れて試驗室を出なかつた。其の熱心は到底凡人の及ぶ所でない。そして此の發明は一八八〇年特許權を得たが、これによつて世界の燈火は一大革命を惹起した。これ、實に彼が三十三歳の時であつた。

次に彼が發明したのは蓄音器であるが、これは殆ど偶然

の發明だつた。つまり電話機の振動によつて思ひついたのだつた。如何に偶然だとはいへ、畢竟不斷の周到な注意が、かゝる些事によつて大發明をなすに至らせたものである。かやうに、彼が注意と熱心とによつて發明したものは、屈指に暇がなく、其の數は既に一千餘種に上つて居る。かの活動寫眞なども亦其の一つである。

彼は幼にして愚鈍視せられ、貧窮の中に人となり、東西に流浪したにもかゝはらず、遂に大なる功を成した。これ蓋し終始一貫努力の二字に生きたからである。彼は自ら「予は十五年間毎日平均二十時間づつ仕事をした。」と言ひ、また「予は蓄音器をのぞく外は、一も偶然に發明したものはない。」

些事

流浪ルラウ。

終始一貫

と言つた。これを以て見ても、彼が如何に努力の人であるかを知ることが出來る。幼年時代の遲鈍必ずしも失望すべきでない。たとひ牛の歩みは遲くとも、遂には千里の道を行くではないか。

（野邊地天馬—近世偉人物語）

過を改むるに自ら過てりと思ひつかば、それにてよし。その事をば棄てゝ顧みず、直ちに一歩踏み出すべし。過を悔しく思ひ、取繕はんとて心配するは、茶碗を割りたる時、その缺を集めて合はせて見ると同じ事にて、詮なき事なり。

命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は始末に困るものなり。この始末に困る人ならでは、艱難を共にして國家の大業は成し得られぬなり。

（西郷隆盛）

野邊地天馬　名は三右衞門。著述家。岩手縣の人。明治十八年生。

トレビーゾ Treviso イタリヤ北部の町。
ベネチア Venezia 同上。
ピアベ Piave イタリヤ北部の河。
グラッパ M. Grappa アルプス連山中の一峯。
チェゼン M. Cesen 同上。

一三　トレビーゾにて

水の都ベネチアから西北に渡つた處に、肥沃な平野が涯なく連つてゐる。此の平原の、ピアベ河から四里ばかりの地に、トレビーゾといふ町がある。伊墺軍が必死と守るグラッパとチェゼンとの兩峰に近い處なので、大戰中敵の砲彈・爆彈に、晝となく夜となく打壞された處だ。

一九一八年六月、敵の飛行機が又しても此の町を襲擊した時、敵の投下した巨大な爆彈が、町の西方にある伊軍の火藥庫に飛び込んだ。それが爆發したが最後、八階でも十階でも根こそぎに粉碎されてしまふのだ。

ベツーチ Brigadiere Martino Veduti
直覺的

火藥庫の見張をしてゐた少年憲兵ベツーチの顏は、さつと蒼白を呈した。と、彼は彈丸の樣に火藥庫に飛び込んだ。

見ると、爆彈は火藥庫の屋根を貫き、矢の如く床の上に直立してゐる。その下端に裝置された導火線は、青白い煙を立てゝ燃えてゐる。見る〳〵中に導火線が短くなつてゆく。僅か一二寸の長さであるから、燃えつくすまでに三分間を要しないのだ。それが燃え終つたら、此の火藥庫の全部の爆發だ。彼は直覺的に爆彈に飛びついた。さうして、ぷす〳〵と燃えてゆく導火線を、右の手に卷きつけて捩ぎ取らうとした。取れぬ。線が燃える。掌から手の甲にかけて、ぢり〳〵と燃えて行く、妙な匂ひを立てゝ。

飛鳥の如く

渾身 コンシン。

燃え縮まつた短い導火線が、燒け爛れた手からするりと拔けた。まう線は寸を殘さぬ。

此の少壯なる憲兵は、飛鳥の如く身を爆彈に投げかけた。そして、その僅かに殘つた導火線をしつかり口に咬へて、全身の力をこめて、燃えてゐる線を喰ひちぎらうとした。彼の脣も、舌も、頤も燒け爛れて行つた。それでもまだ切れない。あゝ、彼の前齒はぽつきりと三本まで折れてしまつた。それで嚙み切れなければ、爆彈と共に散るまでと渾身の力をこめて嚙みついた時、流石の導火線も遂にぷつりと切れた。かくして全火藥庫が救はれ、幾多の人命が事なきを得た。

ピアベ河

塹壕 ザンガウ。

九月中 一九一八年。

閑散

勳章授與式の當日、まだ繃帶につゝまれてゐる姿で、擧手の禮をしながら、官民の拍手に答へる少年憲兵の、少女の如く恥ぢらへる樣子を見て、私は思はず涙してしまつた。

塹壕生活も砲火を交へる日はたまにしかない。平素は暢氣（のんき）な暇な且單調で退屈な時間が續く。私は九月中の閑散な一日、此の町に自動車を飛ばして、町長に賴んで、町の小學校を參觀した。

イタリヤでは、大戰中戰線に近い處でも、小學校は學業を

休まず、午前中は平素の通り授業した。

私は女の校長に連れられて、尋常四年の教室に入つた。

讀方の授業中だ。女の教員が説明を終へて、生徒に讀ませる。男生徒が一人起つて、讀本を手にして、大きな聲で讀んでゐる。其の時、突如、

ずどーん！

物凄い爆聲と共に、中庭邊で爆發した。窓硝子がぴりぴりと震へる。建物がぶる〳〵と身慄ひする。何處かで硝子が破れて落ちる音。

私はその刹那、全校の生徒が悲鳴を上げて、總立ちになつて我先に逃出す事を、直覺的に豫期して教室を見渡した。

先天的

下位春吉　東京高等師範學校出身。福岡縣の人。

叫ばない。泣かない。起たない。

皆、「頭左！」と號令でもかゝつた様に、席についた儘、先天的に中庭の方を見やつた。起つて讀本を讀んでゐた生徒も、一寸止めてその方を見たゞけ。平氣で直ぐにその後を讀み續けた。聲も慄へてゐない。一同がまた讀本に見入る。

私は夢見る心地がした。

（下位春吉―大戰中のイタリヤ）

君が代をおもふ心のひとすぢに我が身ありとは
思はざりけり　（梅田雲濱）

大君のためには何かをしからむ薩摩の瀬戸に身
はしづむとも　（僧　月照）

一四　北極線を越えて

思ひかけずも、甲板の上で大砲の音が響き渡りました。私は其の音にうち驚くと同時に、今、遠く北して、まさに北極圈内へ這入り込んだ身の上になつたといふことにうち驚いたのでありました。

大砲の合圖は、どの船も北極圈に這入る時必ずすることになつてゐるのださうです。さうして、此の合圖があると、船客一同は、上甲板に集る約束になつてゐましたので、吾々は陽氣に騷ぎつゝ、上甲板にいたり、何か待設けるやうな心持で、船長を取卷きました。すると、舳の方の物蔭から、ゆる

北極圈　北緯六十六度三十二分三十秒の點を連結したる線。

やかに、のそり〳〵と、一つの怪物が歩いて來るのでありました。水夫服のぼろ〳〵になつたらしい上に怪しげな外套を纏ひ、船綱の太いので帶をして、おどろの髮はまさしく昆布に違ひないし、膝を越える長い長靴は海豚（いるか）の皮とでもいふのでありませう。黑やら赤やらで塗つたマスクの眞中から高々と鼻の聳えてゐる下に、三角の口から太い聲を出して、吾々にウェルカムを呼掛けるのでありました。

船員が船客の名を一々呼擧げるにつれて、それ〴〵船長の方へ赴きますと、其の怪物――それはネプチューンださうです――は、老若男女、それ〴〵に、愛想と冗談とを云ひながら、握手をしつゝ北極線通過の證明書を與へるのでした。

海豚　游水類に屬する哺乳動物。
マスク　Mask　面（めん）。假面。
ウェルカム　Welcome　歡迎の意。
ネプチューン　Neptune　ギリシヤ神話中の海神。
冗談　ジョウダン。

その愛想毎に、冗談毎に、一同は、はしやぎ、笑ひ、手を拍ち、足踏をして、喜ぶのでありました。

船は、海岸と島々との間を走つて、北へ〳〵と進みました。其の海岸にも、島々にも、黒ずんだ岩が聳えてゐます。其の高いのは、九百米を越える山なのであります。固より北極圏内のことですから、七月といふのに雪を頂いて居ります。併し、其の岩と山との間には平地があります。

昔、神様が世界をお創りになつた時、ノルウェーに平地を造ることをお忘れになつた。後でお氣がついて、肩の嚢の底に殘つてゐた少しばかりの土をかき集めてお撒きになつたのが、その小さな平地なのださうです。神様は、斯くして、小さな平地しかノルウェーの人々にお與へになることが出來なかつた代りに、その平地を愛するといふ心をお與へになつたのださうです。ノルウェーの人々は、神様から授つたこの心で、その平地を大切に致します。其處に畑を作つて野菜を植ゑ、其處に草野を營んで牛と山羊とを育てます。

そして、その平地に小さな木の家を建てゝ、それを白いペンキで塗ります。毎年、夏が來ると必ずこれを塗り替へます。心持の良い程鮮かな眞白さのその壁に小さな窓があります。その窓に白いカーテンが下つてゐて、そのカーテンの下に赤い花の鉢が竝んでゐます。その鉢の花の間か

ノルウェー Norway 歐洲北部スカンヂナヴィア半島の西部を占むる國。

ペンキ Paint の轉。

カーテン Curtain 窓掛。

ハンカチ Handkerchief

ら、色の白い、眼の涼しい、顏の圓い、髮の毛の黃金色の子供が、吾々を眺めてハンカチを振つてくれます。船が岸を程近く通る時、吾々は、その家の窓にその愛くるしい顏を認めることが出來るのであります。船が港へ著きますと、その愛くるしい顏が、窓から飛出して、水際に立つて、盛んに吾吾に向つてハンカチを振つてくれます。若い人々も、老いたる人人も、皆走り出でて、船を波止場に迎へてくれます。船では、

ノルウェーの港

恙　ツツガ。病などの禍難をいふ。

愉快な曲を奏します。やがて、船はまた錨を上げて、次の港へと北するのです。人々は又送つてくれ、船も亦樂を奏して之に答へました。極北の人達よ、恙勿れと私共はハンカチを振りました。極東の人よ、復相見むともいひ顏に、人々も亦帽子を振つてくれるのでした。船はこのやうにして次第に港より港へと北するのでした。

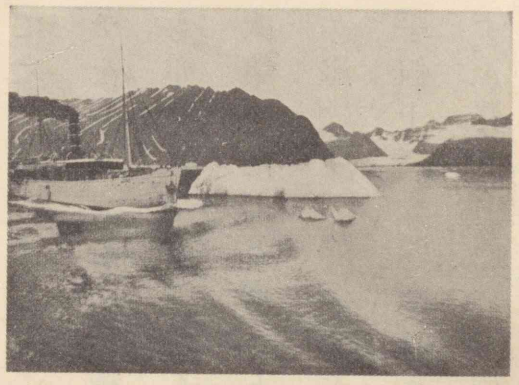
海は廣い靜かな水を湛へてゐます。遙か南に當つて地平線上に太陽が見えます。それは眞夜中の太陽であります。眞夜中の十二時。併し、それは晝です。太陽は地平線上にあるのです。さはあれ、心からにや、光が弱くなります。太陽は海に下らうとして、此處に暫く佇み、稍〻考へた末で、復

黄昏　タソガレ。
黎明　レイメイ。

夕まけて
ノースーケープ North Cape
ノルウェーの極北地にある岬。マゲレ島より北氷洋に向ひて突出する高角にして頂上は海拔二九〇餘米。

空へ上つてゆくのであります。それは正に黄昏といふのでせう。そして、同時に黎明であります。

この地方に夏が來ると、太陽はその光を貪らうとする草木の爲に、夜の休息を止めて、總てを照らしてくれるのです。さうして、その間に、人人は大いに働き、草木は伸び、家畜は大いに太るといふのであります。


ノルウェー北端の海

船は北へ走り續けて居りました。夕まけて雨の降りしきる中に、ノースーケープが見え出しました。吾々は、吹きまくる風の中に、降りしきる雨をとほして、荒れわたる浪の上に、その大きな、いかめしい、北方の巨人を眺め上げたのです。極からの荒い風に向つて立ち、氷洋から寄せる高い浪に脚を踏み占めつゝ、この岩山は、幾千年幾萬年、こゝ歐洲最北端の哨兵線を守つてゐるのであります。黑ずんだ色は古武士の逞しい筋肉を思はせます。併し、その深い幾筋かの襞は、老兵の額の皺を偲ばせます。吾々は、次第にこの老兵に近附いてゆくのでありました。

（牧野英一――海を渡りて野をわたりてによる）

牧野英一
法學博士。東京帝國大學教授。岐阜縣の人。明治十一年生。

飛沫寒き荒海の上に船はあり佐渡が小島にみよしを向くる
離れ島を更に離れし岩の島ひとり離れてさびしからずや

（石榑千亦）

一五　眞夏の海

青空のもとに滿ち湛へて
眞夏の海は輝く
南極と北極とを繫いで
島と船とを浮べてゐる

松林を通り拔けて
熱砂の丘を越えれば
打寄せる浪がしらに
人は魚のやうに戯れてゐる

熱砂
浪がしら

青い海から盛り上つて
轟然として白く崩れる波
走り狂つて磯に遊ぶ
海の子のおもしろさ

拔手を切つて波に乘れば
陸全體が躍つてゐるやうだ
眞夏の海は輝く
高い〳〵青空のもとに

一六　七月の星座

毎年夏になつて、そろ〳〵夕方の風が戀しい頃になると、物置にしまつてある竹製の涼み臺が中庭へ持出される。これが持出される日は、私の單調な一年中の生活に、一つの著しいくぎりを附ける重要な日になつてゐる。まう明日あたりは涼み臺を出さうぢやないかといふ事が、誰かの口から言ひ出される。しかし其の翌日が雨であつたり、さうでなくても、色々の事に紛れたりして、つい一日二日と延びる。其の中にいよ〳〵今日はと云ふ事になつて、朝の内に物置の屋根裏から臺が取下され、一年中の塵埃や黴が、ぬれ

黴　カビ。

雜巾で丁寧に拭ひ淸められ、それから裏庭の日影で乾かされる。そしていよ〳〵夕方になつて中庭に持出されると、それで始めて私の家に本當の夏が來たといふ心持になるのである。

涼み臺の外に、折疊み椅子が三つ、同時に竝べられて、一同が中庭へ集る。まだ明るい宵の中には、繩飛をする者もあれば、寫生帖を出して、おばあさんの後姿をかいてゐる者もある。明朝咲く朝顏の蕾を數へて報告する者もある。幼い女兒二人は、緣側へ色々な花を竝べて花屋さんごつこをする事もある。暗くなると、花火をしたり、お伽噺をしたり、おばあさんにお國の話をさせたりしてゐる。幼い子等に

幻像　ゲンザウ。
家鴨　アヒル。

は、まだ見たことのない父母の鄕國が、お伽噺の中の國のやうに、不思議な幻像に滿たされてゐるやうに思はれるらしい。例へば鄕里の家の前の流に家鴨が澤山遊んでゐて、夕方になると、上流の方の飼主が小船で連れに來るといふやうな、何でもない話でさへ、何かしら一種の夢のやうなものを、幼い頭の中に描かせると見える。それでいつもお國の話をねだつては、おしまひに「あたしもお國へ行きたいなあ。」と一人が云ふと、まう一人が同じ言葉を繰返すのである。子供等の亡祖父の若かつた頃の昔話も屢〻出る。私自身が子供の時分に幾度も聞かされた話が、また同じ母の口から出るのを聞いてゐると、それがまう遠い〳〵昔の出來事で

會津戰爭　明治元年、會津藩主松平容保が奥羽越後の諸藩と聯合して反せし時の戰。
西南戰爭　明治十年、西鄕隆盛の反せし時の戰。
淨化
純化

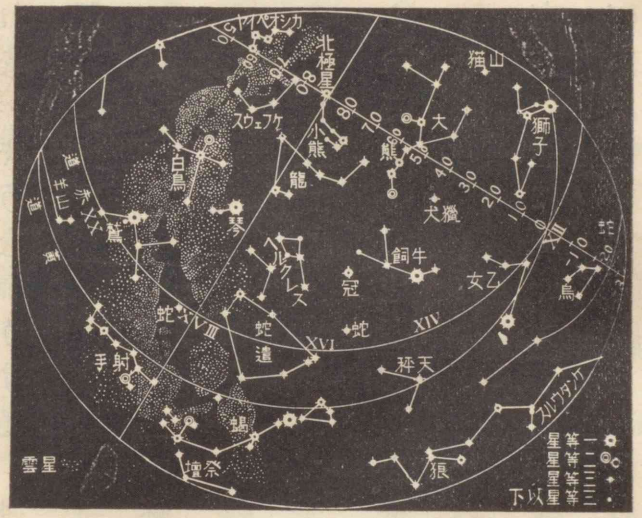
あつて、數年前まで生きてゐた私の父に關する話とは思はれないやうな氣がする。まして祖父を見た事のない、或は朧げにしか覺えてゐない子供等には、會津戰爭や西南戰爭の昔話は、書物で見る古い歷史の斷片のやうにしか響かないだらう。そしてそれだけに、却つて祖父に對する懷かしみは、淨化され、純化されて、子供等の頭の中の神殿にをさめられるだらうと思はれる。

今年の夏、涼み臺が持出されて間もなく、長男が宵の中に南方の空に輝く大きな赤味がかつた星を見つけて、あれは何かと聞いた。見るとそれは火星であつた。星座圖を出して來て、其の上に鉛筆で現在の位置をしるし、其の脇へ日

遊星　太陽の周圍を週行する星。

星宿

附をかいて置いて、此の夏中の此の遊星の軌道を圖の上で追跡して見ようといふことにした。それが動機となつて、子供は空のよく晴れた晩には、時々星座圖を出して、目立つた星宿を見較べてゐた。其の頃は、まだ織女や牽牛は、宵の中にはかなり東にあつた。西の方の獅子宮には、白く大きな木星が、屋根越しに氷のやうな光を投げてゐた。



七月の星座

素人　シロウト。

莫大

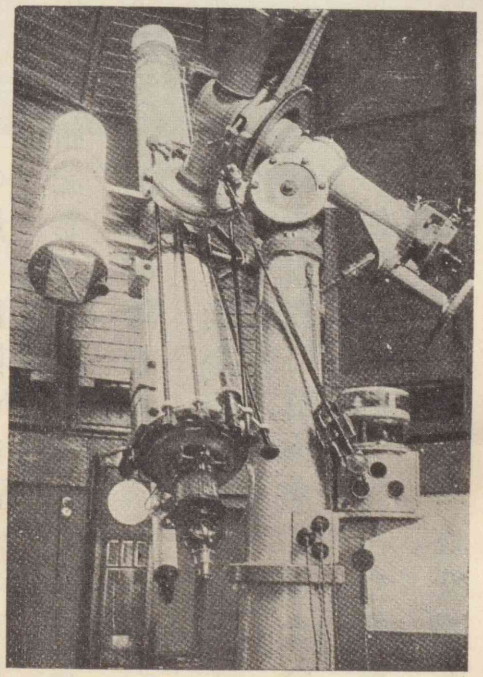
盲龜云々　法華經やその他の經典にある句。容易に會ひ得ざるにたとふ。

空を眺めてゐるうちに、時々流星が飛んだ。私は流星の話をすると同時に、熱心な流星觀測者が、夜中空を見張つてゐる話をして、それから新星の發見に關する話もして聞かせた。おもだつた星座を諳記してゐれば、素人でも新星を發見し得る機會はあるといふ事も話した。

一秒時間に十八萬六千哩を走る光が、一箇年かゝつて達する距離を單位にして、測られるやうな莫大な距離をへだてゝ散布された天體の二つが、偶然接近して、新星の發現となる機會は、譬へば盲龜が百年に一度大海から首を出して、孔のあいた浮木にぶつかる機會にも比べられるほど少さうであるが、天體の數の莫大な爲に、新星の出現はそれほど

宇宙

珍らしいものではない。唯光度の著しく強いのが割合に稀である。こんな話よりも子供を喜ばせたのは、新星の光が數十百年の過去のものだといふ事であつた。我が家の先祖の誰かゞ、何處かでどうかしてゐたと同じ時刻に、遠い〳〵宇宙の片隅に突發した事變の報知が、やつと今の世に、此の世界に屆くといふ事であつた。



天體觀測望遠鏡

二等星

八月になつてから、雨天や曇天が暫く續いて、涼み臺も片隅の戸袋に立てかけられたまゝに幾日も經つた。

或朝、新聞を見てゐると、某理學士が流星の觀測中、白鳥星座に新星を發見したと云ふ記事が出てゐた。其の日の夕方に涼み臺へ出て、子供と共に其の新星を搜したらすぐ分つた。暫く見なかつた間に季節が進んでゐる事は、織女・牽牛が宵の中に眞上に來てゐるのでも知られた。そして新星はかなり天頂に近く、白鳥座の一番大きな二等星と光を爭ふほどに、輝きまたゝいてゐるのであつた。

「暫く怠けたので、新星を發見しそこなつたね。」

と云つたら、子供はどう思つたか、顏を眞赤にして面白さう

に笑つてゐた。

其の中にまた曇天が續いて、朝晩はまう秋の心地がする。どうかすると夜風は涼し過ぎる。涼み臺もつい忘れられがちになつた。從つて星の事も、まう子供の頭からは消えてしまつてゐるらしい。新星の今後の變化を研究すべき天文學者の仕事は、これから始まるので、學者達は毎晩曇つた空を眺めて、晴間を待ちあかしてゐる事であらう。

（吉村冬彦―冬彦集）

天の川さやかにすみて遠蛙なくねしたしき夜ごろとなりぬ

吉村冬彦　本名は寺田寅彦。理學博士。東京帝國大學教授。高知縣の人。明治十一年生。

押出し　人中に出たる時の樣子。

彷徨ふ　サマヨふ。

皂莢　サイカチ。荳科に屬する落葉喬木。

一七　森の英雄

兜蟲は森の英雄です。鋼鐵製の兜を被り、鋼鐵製の鎧を著てゐる、其のどつしりした押出しは、どんな蟲に較べたつて少しも見劣りがしません。

私達はこの英雄にめぐり會ひたいばかりに、朝早く森から森へと彷徨ひました。樫や楢や皂莢を見る度に、私達は立止まつてその幹をゆすぶつてみました。ゆすぶられた樹の若葉は、擽られでもしたやうに、聲高く笑ひさゞめきながら、露の雫をはら〳〵と頭の上に降らしました。

英雄は市街に少いやうに、森の中でも滅多に見附かるも

のではありません。私達は朝晩三日も續けて、森の中を搜し歩いても、たつた一つの兜蟲も見附からなかつた事がよくありました。そんな時には、別の手段を取るより外には仕方がありません。それは友達の持つてゐる兜蟲を、黑砂糖の一塊りと取りかへつこをするのです。

鋼鐵製の兜を被つたこの小英雄がうまく手に入ると、私達は色々な繪具や金粉で以て、その兜と鎧とを塗りました。そして木製の小さな箱を曳かせました。箱には紅毛人の好きさうな血のやうな色をした肉桂水・金米糖・姉樣人形といつたやうな物が、ごたく〳〵載せられてありました。昔々、都大路を練り歩いた牛車のやうなゆつくりとした足どり

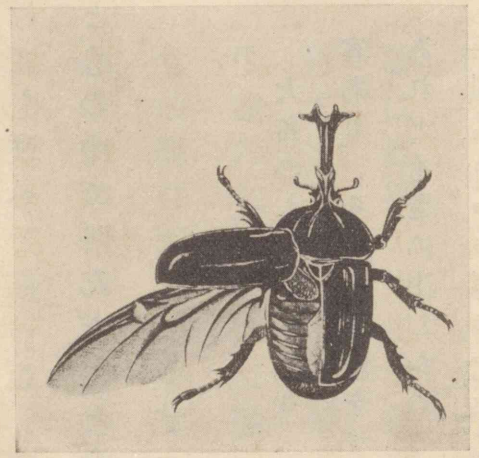
紅毛人　和蘭人のこと。轉じて歐米人のことをもいふ。

金米糖　Confeitos

都大路

で、兜蟲はえつちら、おつちら、それを曳きました。

私達が蟲に對する態度は、大抵自分の遊び友達か、又は家僕扱ひで、どうかすると、殘酷な目にあはせて喜んでゐましたが、唯一つ兜蟲に對してだけは、尊敬に近い感情を持つてゐたことをよく覺えてゐます。臺所から持出した砂糖の塊りで砂糖水をこしらへ、それを山の柏や楢の幹に塗りたてゝ、夕方それを嘗めに來る筈の蟲を搜し歩いて、一匹も見附からない悲しさに、日がとつぷり暮



兜蟲（標本圖）

れ落ちるまで、林の中に立ち盡しながら、

「兜蟲一つ捕れないやうな山は、村長さんの頭のやうに禿げてしまへ。」

と、心の中で叫んだことを今でも忘れません。

（薄田泣菫―太陽は草の香がする）

薄田泣菫　名は淳介。隨筆家。詩人。岡山縣の人。明治十年生。

大名のもとに客あり。振舞に湯漬出でたり。その席に又客あり。それにも膳をすゑたり。又客來あり。「膳を出せ。」とあれども遂に出しかぬる時、物まかなふ者を呼び出し、「何とて手間もいらぬ事のおそきや。湯をえ沸かさぬか。」と叱らるゝ時、手をつかねて、「湯は御座るが、づけが御座ない。」と申したるにぞ、どつと笑ひになりける。

（醒睡笑）

一八　夏日短信

この寺　靜岡縣清水市北矢部にある新定院をいふ。

敬啓。この寺に來りてより早くも十日を過ぎ候。午前は經机の上にて横文字の本を讀み、午後は手拭をさげて泳ぎにゆく外、變りたる事もなく、夜は時々村の子供達六七人遊びに參り、月を踏んで共に唱歌したり、本堂の縁に踞して小生の話すお伽噺を聞いたり致し候。泳ぎにゆく時も、彼等は粟の穗、桔梗の花、鳥の羽などを耳に挿みて隨行致す事これあり、沿道目に觸るゝ草木昆蟲を、一々指點して小生に教へくれ候。そのため、この頃は大分博識に相成り、ちんちろ柿といふのまで覺

火食

棕櫚竹　シュロチク。

山茶花　サザンクワ。

脩竹　シウチク。長き竹。

龍華寺　日蓮宗の寺。靜岡縣清水市村松にあり。

鐵舟寺　禪宗の寺。所在地同上。

え候。

連日晴天の爲、田の水涸れ、小生の居る村にても、雨乞の祈禱始まり候。祈禱者は、一七日の間一切火食せざる由にて、終日、注連(しめ)縄をかけたる竹の下にて鉦を打ち、竹法螺を吹き居り候。

小生の居る座敷は、富士は元より、隣家の桑圃すら見えず、狹き庭に密生したる芭蕉・棕櫚竹・高野槇・梅・山茶花などに遮られて、僅かに空の色を望むに止まり候。

只晩涼微風と共に生ずる時は、一庭の脩竹竿々相磨し、葉々相觸れて、幽興の掬すべきものなきにあらず候。

龍華寺も近けれど、小生は鐵舟寺の碧蓮を愛すること

蓮香月色

ブラウニング　Robert Browning　英國の詩人。(一八一五―一八九九)

鷗外先生　森林太郎。文學博士。醫學博士。陸軍軍醫總監。帝室博物館總長。島根縣の人。大正十一年歿。年六十三。

渉獵　セフレフ。

芥川龍之介　小說家。東京帝國大學出身。昭和二年歿。年三十六。

更に深く、屢〻その本堂の欄によりて、蓮香月色共にほのかなるを賞し候。

ブラウニングはやめに致し候。その代りに鷗外先生の作品を種々讀み候。皆面白く候へども、中にも「意地」の一卷を何度も讀返し候。毎日海水を少しづつ飲むのと、鹽からき御菜を食ふのとの爲に、甘い物が戀しく、近隣の菓子屋は渉獵し盡し候。そろ〳〵鄕愁が起り候へば、その内に歸京のつもりに候。　不悉。

（芥川龍之介―芥川龍之介全集）

スポーツ Sports 競技。
野見宿禰 垂仁天皇の時の人。
希臘 Greece 歐洲南部バルカン半島を占むる國。
オリンピック競技 Olympic games 希臘人がオリンピア神殿の前庭にて行ひし競技。
相撲節會 毎年七月、天皇宮庭に於て相撲を見給ひ、群臣に宴を賜ふ儀式。

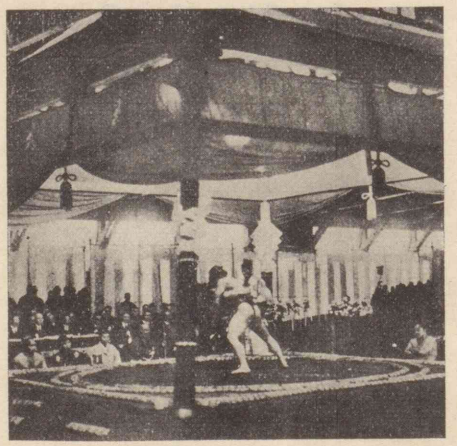
一九　運動二題

一　相撲

我が國固有のスポーツといへば、何といつても相撲である。既に凡そ二千年前垂仁天皇の御代に、野見宿禰が當麻蹶速を相撲で蹶殺したといふ、古代希臘のオリンピック競技にも比すべき古い記錄があるのを見れば、相撲は餘程早くから行はれたものであらう。その後聖武天皇の時、相撲節會を置かれ、屢〻存廢はあつたが、八百餘年も續き、足利時代からは、神社・佛閣等、建築の費用を集める爲に、勸進相撲といふものが始まつた。德川時代には相撲が殊に盛んに行は

津々浦々

れ、諸侯にはお抱相撲を養つたものもある。爾來、相撲は今日に至るまでも盛んで、名さへ國技館といふ相撲專門の觀覽場さへ出來て居る。相撲には



相撲天覽

かやうに古來職業としてゐるものが居るのみならず、國民一般に相撲が好きで、子供の時から相撲をとつてゐる。祭禮・祝典の折などには、村でも青年や大人が相撲をとるし、學校では幼稚園の子供から大學の學生までとる。

こんなに由來が古くて、津々浦々まで行はれるスポーツは恐らく世界の何處にもあるまい。相撲は眞に國民生活

の一要部を成すものといつてよからう。

（下田次郎―運動競技と國民性）

下田次郎　文學博士。東京女子高等師範學校教授。廣島縣の人。

二　マラソン

近代國際オリンピック競技會の種目の一つに、マラソン競走が加へられてゐることは、スポーツマンでなくても、既に承知のことである。そして正しいマラソン競走のコースは四二七五〇米、卽ち二六哩三八五碼である。それは何故であらうか。

時は西曆紀元前四九〇年の秋、希臘アテネの精兵たちは、潮のやうに押寄せる波斯の大軍を、アテネの北の方二六哩

スポーツマン　Sportsman　運動家。

コース　Course　走程。

アテネ　Athens　希臘の首府。

波斯　Persia　ペルシヤ。西南アジアのイラン地方の大部分を占むる國。

三八五碼に横たはるマラソンの野に邀へ撃つた。この一戰は眞に國家の安危を決するところであつた。この戰に敗れたら、波斯の軍勢は、ひた押しにアテネに攻込むに違ひなかつた。

希臘の兵どもは、死物狂ひに戰つた。そして物の見事に、波斯の大軍をうち破つた。ひたすら勝敗を案じてゐるアテネの人々に、一刻も早く勝報を傳へねばならぬと、ファイデピッデスといふ男が、一散に都をさして駈出した。彼は懸命に飛んだ。そして一氣に二六哩三八五碼を走破してアテネの街に足を踏入れた。街の人々は彼の周圍に群がり集つた。滿身の精力を駈け盡した走者は、

マラソン　Marathon　希臘の東南にあり。

ファイデピッデス　Phidippides

「わが軍勝てり。」

と、叫んだかと思ふと、ばたりと大地に倒れて息が絶えた。

この勇しくも健氣な物語に因んで、一八九八年萬國國際オリンピック競技會が成立つと共に、二六哩三八五碼を走破するマラソン競走といふ種目がこれに加へられたのである。

（松村武雄の文による）

一、「死シテ後已ム」ノ一語、言簡ニシテ義廣シ。堅忍果決、確乎トシテ拔クベカラザルモノ、コレヲオキテ術ナキナリ。

一、士ノ道ハ義ヨリモ大ナルハナシ。義ハ勇ニヨリテ行ハレ、勇ハ義ニヨリテ長ズ。

一、士ノ行ハ質實ニシテ欺カザルヲ要トナス。光明正大、皆コレヨリ出ヅ。

（吉田松陰―士規）

松村武雄　文學博士。神話學者。浦和高等學校教授兼東京帝國大學講師。

レイニーア山　Mt. Rainier 米國ワシントン州にあり。海拔四三九四米。

レイニーア公園　同州にあり。

ロングマイア　海拔八三〇米。

上井手村　靜岡縣富士郡。

白糸村　同上。

劍が峰　富士山の最高峰。

大澤　富士山の西側にある幅射狀の谷。

氷河　Glacier 多少の速度を以て流動してゐる氷の流。

二〇　レイニーア山の氷河

レイニーア國立公園の入口から間もないロングマイアの山宿まで、乘合自動車に運ばれて、旅客の群は一休みする。其處は山の絶頂から大波をうつてのたくるニシクォリ氷河に直面してゐる。富士の西側なる上井手村から白糸村あたりで、頂上劍が峰近くから一氣になだれる、大澤の砂礫流を仰ぐにも似てゐる。それは火の流であつたが、ニシクォリは氷の流である。正午の白日を直ぐに受けて、氷河は白熱化したやうに、音もなく燃えさかる。その表面は、勿論平らかでなく、爪先き立つた波頭が、そのまゝ凝固したやう

錯落 サクラク。入リまじるさま。

チョコレート Chocolate

に、針を立て列ねてゐる。針と針との隙間は、深淵の色にしても見まほしい青味を帶びて、透き通る。しかも急傾斜へと、俯向いてゐるから、大小無數の針頭や玻璃片が、錯落として音響を立てないばかりに、揉み合ひ、へし合ひをしてゐる。

白雪を蹈みて

坂道を曲りくねつて上ると、山容は寸は寸づつ、尺は尺づつの新しく美しい氷河景を展開する。そしてニシクォリ谷源流の橋にかゝると、何處からころげ落ちたのか、チョコレート色の泥にまみれた驚くべき巨大な土手が、川の源に乘しかゝつて、此の川やらぬと大手をひろげたやうに、立塞がつてゐる。何ぞ知らん、その泥まみれの土手が、名にし負ふニシクォリ氷河その物であらうとは。氷河の終端が谷へ押出されて、その底は二重の虹の如くに彎曲したアーチ形の洞門を開いて、小雨そぼ降る水音が聞える。兩側に聳えた崖から、砂や塵が浴せ掛けるやうに落ちて、下界へとまろび出た氷河は、皺だらけにだぶつく皮膚となつて黑つぽく汚れてゐる。

アーチ Arch 弓形門。

下界

パラダイス高原 海拔一六〇〇米

その夕べ、パラダイス高原の御花畑近くにあるパラダイスーインに一泊して、翌朝、同じニシクォリ氷河へと、一行十五

萬年雪

命綱

クレッヴァス Crevasse 氷河の割目。

氷河時代 往古氷河の氾濫せる時代。今より七十萬年乃至八十萬年前と考へらる。

人、氷河の本流を下るべく、萬年雪の絶壁を、一人づつ杖に身をよせかけ「く」の字形に辷り落ち、案内者の投げ掛ける命綱に攫まりながら、だゝつぴろい雪田の中に大小の離れ島のやうな漂石を避け、ニシクォリ氷河の中流へ入つた時の、その氷河の美しくもまた清かりしことよ。クレッヴァスの底を覗けば、底知れぬ青味を帶びた氷河は、冷血の魚の肌ざはりの如き感觸を以て人に迫る。誠にこれ現世の物にあらず、遠き世の氷河時代

氷河

おこし 菓子の名。

アルペン杖 Alpenstick 登山杖。

を、人の心頭に蘇へらすものである。　嚮に下界で見た氷河は、汚泥で被覆されてゐた爲、屢〻氷河の本質を見るを得なかつたが、此處では氷上一面、本年の春の新雪に薄化粧して、雪を踏めば靴の底に堅々たる薄氷の割れる音あり、試みに雪を碎いて氷片を撮み、指で揉めば、ぼろ〳〵としておこしのやうな細粒となる。　更にアルペン杖の石突きで氷片を刺貫ぬき、これを檢すると、水から凝結した普通の氷のやうに、純粹に透明ではないが、一抹の氣泡を含んで、曇りを帶びた蒼白さがある。　氷河の表面は、縱横に波立つて氷塊となつて隆起し、氷柱となつて直立し、柱と柱との間に雪の浮橋がアーチのやうに危ふげにかゝつてゐる。　殊に驚くべきは、

間一髪

しをらしさ

劍戟 ケンゲキ。

天龍川 諏訪湖より溢れて遠州灘に注ぐ。

急湍岩を嚙む

まつしぐら 烈しく急進するさま。

閃々 センセン。きらきらするさま。

平らかなる氷河の表面に、間一髪の隙間としか思はれない並行線の裂目が、一文字に引かれてゐるが、その狹い〳〵一文字ですら、綱を入れると二百尺も深いことが知られるといふ。それかと思ふと、表面のくぼんだ處に、氷がとけて、雨の溜水のやうな小湖を湛へ、風吹けば小波が立つしをらしさもある。しかも振仰いだ絶頂から、八合目近くまでの、氷河の急峻なる、硬直の奔流は、まるで劍戟を立て列ねた姿である。私の知るところの、天龍川の最難處に於て、急湍岩を嚙む荒々しさが、この氷河の本流に於ては、液體と固形體との相違こそあれ、そのまゝの實相となつて、急角度をまつしぐらに、狹い谷間を閃々たる破斷口を大空に向けて威嚇してゐる。誰の顏にも凄艶の美に對して感ずる恐怖の色が讀まれる。其處から引返すべく、雪と氷と堆石との幾筋路を登り降りして、もと來た路の御花畑の緣へと這上つて、始めて土を踏んだ時のその柔らかさ、その溫かさ、人間の親しみ易い感觸は土なるかなと思はれた。

（小島烏水―氷河と萬年雪の山）

小島烏水 名は久太。實業家。

又景色無雙なるは、薩摩の櫻島山なり。蒼海の眞中に唯一つ離れて獨立し、最も嶮峻なるに、日光映ずれば、島の色紫に見え、絶頂より白雲をむすが如く烟常に立ち登る。たとへば青疊の上に香爐をおきたるが如し。

（橘　南谿）

お年寄　町役人の上席者。
町役　町役人の略。名主、五人組等をいふ。
下戸

二　壺と提灯

さるお町内に婚禮振舞がござりました。お年寄をはじめ、町役、家持の人々、一同が座に著きますると、さま〴〵の馳走がある。時にかの年寄は、酒と聞いては笹の露にも醉ふほどの下戸ぢや。座中を廻る盃の間、退屈さうにしてゐられると、亭主方が氣の毒に思ひ、「お年寄様は御酒は召しあがらず、御退屈にござりませう。ちとお菓子なりともお取り下されい。」と、南京の古染附の壺に大輪の金米糖を入れて、年

南京の壺　祥瑞作

きしむ

無理無體

寄の前へ持つてくる。座中も、「これはよいお心づき、ひらにお菓子を召しあがれい。」と、勸むるに、年寄もわるうはなし、「しからば頂戴を致しませう。」と、壺を引きあげ、手首を突つこみしなに、少しきしむやうに覺えたが、無理に手をさし入れて撮み出さうとするに、手首がつまつて拔けませぬ。どうぞして拔けるかと、色々にこじ廻して見ても、引つぱつて見ても拔けず、まご〳〵して居らるゝと、側から見つけて、「どうなされましたぞ。」「いや、手が少し詰りまして思ふやうに拔けませぬ。」と、眞顏になつていはるゝ。「それは氣の毒。私が壺を持つて居りませう。無理無體に手をお引きなされ。」と、一人が向うへまはつて壺をつかまへ、あとへ引くと、年寄は手

景清と美保の谷　惡七兵衞景清。美保の谷十郎。

錣　シコロ。兜の後に垂れて、頸を被ふもの。

司馬溫公　名は光。字は君實。溫公は諡。宋の名相。（西暦一〇一九―一〇八六）

を前へ引く。互にえいやと引合ふ有樣、景清と美保の谷が錣曳をするやうなと、座中が一同にどつと笑へど、年寄はなか〳〵笑はず、泣顏になつて、「どうも痛んで拔けませぬ。」といふ。さあ、これから大騷ぎになり、「醫者どのを呼んで來い。骨接ではゆくまいか。」と、酒宴の興も醒め果てました。時に五人組が一人進み出で、「いづれもお騷ぎなさるな。我等承はつたことがある。昔、司馬溫公といふ人、幼いとき大勢の小兒と共に、大いなる壺のほとりに遊

道話

しかつべらしく

煙管　キセル。

びましたが、一人の小兒誤つてかの壺の中へはまりました。大勢の子供はこれを見て逃げ歸つたが、司馬溫公一人は歸らず、側なる手ごろの石を取つて、かの壺へ投附けましたれば、壺は割れて、はまつた小兒は不思議に命を助かりました。と、或人の話ぢや。今お年寄の御難澁はこの話によう似てある。いざや、われらが司馬溫公となつて、たとへばその古染附の壺が、失禮ながら何程高金の品でも、お年寄の腕には換へられぬ。」と、しかつべらしく煙管をひつさげ、向うへまはれば、年寄は氣の毒さうに、壺をかぶつた手を突き出すと、ただ一打に打碎いた。何がさて、座中は金米糖が散らかつて雪を降らしたやうになると、「やれ、お年寄、お助かりなされた

か。」と、その手を見れば、拔けぬこそ道理なれ、金米糖を一杯攫んでゐられたと申すことぢや。なんと可笑しい話ではござりませぬか。攫んだ物を放しさへすれば、自由自在に手は拔けたものを、一度攫んだら首がちぎれても放すまいと、片意地な生れつき、それで自由自在の大安樂が出來ぬのぢや。かく申せば錢金の事のやうなれど、攫むものはこれば かりではない。器量のよいを攫み、賢いを攫み、貧惜みを攫み、家柄を攫み、身代のよいを攫んで、放すまいとかつぎ歩くによつて、教へを聞くこともならず、樂をすることもならず、愼みも出來ず、せん方なさに顏しかめたり、酒飲んで紛らしたり、さりとては氣の毒なものでござります。壺割つてしまうてからは、何いうても詮ないことぢや。身代の壺を割らぬさき、御用心が第一でござります。

片意地

それでもわが本心は明かな、明德は曇つてはない、洗濯するには及ばぬと思ふ人があるものぢや。これを喩へて申しまするに、私のやうな盲が一人旅をして、心やすい旅籠屋にとまり、「あすの朝は七つ立をさして下され。」と賴む。亭主も心得、朝早う立たせまする時、盲は旅の支度をとゝのへ、杖を持つて出ようとすると、亭主がいふには、「まだ夜深いに提灯をお持ちなされ。お貸し申しませう。」「何をいはしやるやら、盲が提灯を持つて何にするもので。」「いえ〳〵、お前にはいりますまいけれど、暗がりをとぼ〳〵お出でなさるゝ

旅籠屋ハタゴヤ。

七つ立

おのれ　古語。今の「おまへ」にあたる。

と、往來の人がゆき當りまする。それで提灯をお持ちなされと申すことぢや。」「なる程さうぢや。私はゆき當らねども、えて目明がつき當る。さやうならお貸し下されい。」と、提灯をさげて道五六町出ましたところが、向うから來る人が盲にはたとゆき當りました。そこで大きに腹を立てゝ、「おれに突當るやつは盲か。」向うの人も癇癪に障り、「おれは盲ではない。さういふおのれがどう盲ぢや。」「いや〳〵、おれは盲ぢやけれども、人には突當らぬ。おのれが盲にきまつた。」向うの人も愈〻腹立て、「おれを盲といふ證據は、何ぞ覺えがあつていふのか。」「おゝ、覺えがある。おのれを盲といふ證據は、この持つてゐる提灯が、おのれが目にはかゝらぬぢ

柴田鳩翁　字は陽方、通稱謙藏。心學者。中年明を失ひ、諸國を遊歷して心學講話をなす。京都の人。天保十年歿。年五十七。（二四四三―二四九九）

鳩翁道話　三卷。鳩翁の心學に關する講話集。

やないか。」と、ずつとさし出す提灯の火は、宿屋の門口でとうに消えてしまうてある。なんと氣の毒な盲ではござりませぬか。火もともさぬ眞暗な提灯をさげて、これでも明かなと思うてゐるのは、本心見失うて、身勝手な心を本心ぢや本心ぢやと思ひ、洗濯せうとも愼まうとも思はぬ人にようなものでござります。どうぞお互に、火は消えてはゐないかと、日々に吟味が致したいものでござります。

（柴田鳩翁―鳩翁道話）

盲人千人目明千人　（俚諺）
一盲衆盲をひく
番町で目明盲に道を聞き　（川柳）

伊能忠敬　もと神保氏。上總國に生る。下總國佐原の伊能氏を嗣ぐ。高橋東岡に就きて曆學測量法を學び、宇内輿地全圖を著す。文政元年歿。年七十四。（二四〇五―二四七八）

才氣

一擧手一投足の勞

二三　伊能忠敬

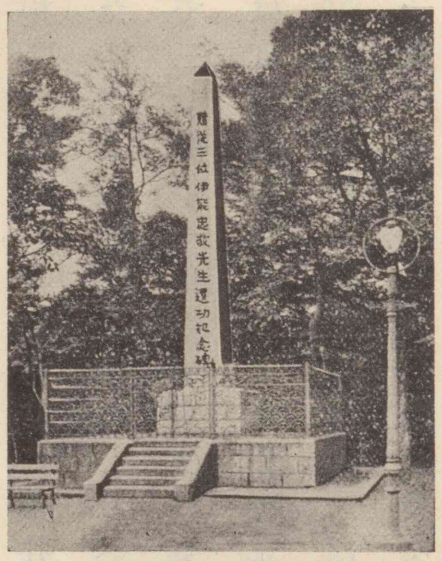
忠敬、年十八にして伊能氏の養嗣子となり、五十歲にして家をその子景敬に讓るまで、自ら抑へて平々凡々の人となり、一意專心たゞ伊能家の衰へたるを興し、己が任務を最も圓滿に、最も美しく果さん事を期し居たりき。

伊能忠敬

凡そ才氣ある者の常として、己が欲せざることには、一擧手一投足の勞をも惜しみ、單に己が欲する事にのみ身を委ねんとするは、免れがたき習なり。

德量

たとひ己が欲せざる事なりとも、その爲さゞるべからざる事たる以上は、甘んじてわが情を屈し、わが氣を抑へて、わが爲すべき事を爲すは、その人啻に才氣あるのみならず、また實に德量ある人なりといふべし。世に才氣ある人は多し。才氣ありて德量ある人は少し。德少くして才のみ優れたるは、譬へば鋭き刃の肉薄きが如し。折るゝ恐は免るべからず。



伊能忠敬遺功記念碑

物を截ることはよくすべし。されば才子の奇才を抱きながら、成功を見ずして中途に事

を廢する例は、數へも盡し難し。

忠敬は算數・暦象の學を嗜み、かつこれをよくすべき資を抱きながら、自ら甘んじて市井の凡人に伍し、「伊能氏を嗣ぎたる上は、伊能氏を榮えしむべし。」といふを、唯一の希望として、三十餘年一日の如く、ひたすら家業に丹誠したるが如きは、實にその德量の大なるを見るべきなり。

市井　町なか。

かくの如くにして伊能家は興りぬ、景敬は家を嗣ぎぬ。一家の事また憂ふべきものなし。忠敬が伊能家に對する義務は、こゝに於て圓滿に果されたりといふべし。忠敬は始めて閑散の身となりぬ。忠敬の身はこれより忠敬の自由に用ふることを得べし。この時は忠敬年既に五十歲、常

人にありてはもはや老境に入るべき時なり。されど心の壯んなる人には、何歲の時も前途多望なる青年の春なり。爲すある人には、如何なる場合もわが力を試むべきところたり。忠敬は常人が世の務を辭し、花月の遊を事とすべき時に當つて、始めて學に就き、而して後漸く世に出でんとせり。後の爲すあらんと欲する者、苟も眞に爲すあらんと欲せば、青年空しく過ぎて身の將に老いんとするを歎ずることなかれ。

花月の遊　風流な遊びごと。

さるほどに、忠敬はその鄕里佐原を出でて、飄然として江戸に到り、寓を深川に定めて一學生となれり。かくして忠敬は身をおのが好める學に委ねたるが、おのが滿足し信仰

佐原　千葉縣香取郡。

すべき師を得ることは容易ならざりき。折から幕府には曆法改正の擧ありて、これがため特に大阪より高橋作左衞門といふ者を召されたり。作左衞門、東岡と號す。算數・曆象の學に精し。忠敬急ぎ東岡を訪ひ、その學の深きに服して、直ちに師弟の契を結びぬ。時に忠敬は五十歲にして、東岡は三十二歲なりき。

曆法改正　寛政九年（二四五七）に成る。寛政曆これなり。

高橋作左衞門　名は至時。號は東岡。大阪に生る。曆學を好み、天文を學び、遂に幕府に拔擢せられて曆法改正の事に從ひ、寛政曆を作る。文化元年歿。年四十一。（二四二四―二四六四）

普通の人情にては、おのれより若き人に會ひては、たとひ、おのれが學業などその人に及ばずとも、なほ强ひて自ら高ぶり、敢へて頭を下げざるが習なれども、德量ある忠敬はいかでか眞に敬ふべき學識ある人に向ひて拜伏するを厭ふべき。喜びてそれが門下生となれり。然れども同門の學

生等は、師たる東岡の若くして、弟子たる忠敬の老いたるを、屢〻笑柄となしたりといふ。晩學の難きは、實に何れの世にありても、かゝる事實の存するがためなり。これを以て、非凡の士にあらずば、大抵自ら恥ぢて、師に就き學を修むる勇氣を失ひ、終に空しく志を抱いて墓穴に入るに至るなり。本來よりいへば、老いて學ぶは、たま〳〵その志の淺からざるを顯すのみ、また何の不可かあらん、況んやまた何の恥づべきところかあらん。思ふに區々たる群小の嘲笑も、忠敬に於ては、たゞ蛙鳴蟬噪を聞くが如くなりしなるべきのみ。かゝれば、忠敬と同門學生との優劣勝敗は比較するまでもなく明かなることなり。忠敬の學術は、さながら堤防の決

笑柄　セウヘイ。わらひぐさ。

蛙鳴蟬噪　アメイセンサウ。蛙や蟬がやかましく鳴くこと。

潰して洪水の押寄するが如き勢ひを以て歩を進め、終にその蘊奥を極めて、東岡門下に肩を比すべき者なきに至れり。

蘊奥　ウンアウ。學問技藝等の奥義。
肩を比す

かくて忠敬が、始めて幕府より測量の命を蒙り、その修得したる學術を實地に運用する機に際したるは、實にその五十五歳の時なりき。　五十五歳といへば、人は頽齡用ふるに堪へずとする年齡なり。　されど忠敬は氣力旺盛、さながら壯年の人の如く、測量の命下るに會ひて、喜色滿面に溢れ、卽時にも出發せんとする勢ひありきといふ。　忠敬が事に當りて勇往直前、險阻に屈せず、風濤に辟易せず、遂にその志すところを完成したりしは、一にこの元氣勃々として燃ゆるが如き心を、胸裏に藏めたるによるなり。

頽齡

辟易　ヘキエキ　おそれへこむ。
元氣勃々

幸田露伴
名は成行。文學博士。帝國學士院會員。東京の人。慶應三年生。

誰か日本人を早熟早老の人種なりといふ。　これ、豈我に伊能忠敬あるを知らざるものにあらずや。

（幸田露伴―露伴叢書による）

日根野備中守、朝鮮に使として行きし時、黑田如水に銀を借り、歸りて後如水のもとに到りけるに、如水近習の士に、「さきに人の贈りこし鯛を三つにして、その骨を烹てもてなせ。」といひければ、咨嗟の甚しき事よと思ひ居たり。　やがて肴を出だし酒宴はて〻後、かの借りたる銀百枚取り出だして返すに、如水「初めより返し給はらむの心にて貸し〻にはあらず。　異國に渡らる〻により憑まれしかば贈り參らせしなり。」とて受取らずして止みぬ。

（湯淺常山）

二三　四季小品

一　初春の山

後山に上る。

春空靄として四山霞棚引き、爭はれぬ春となりぬ。

靄　アイ。

海はゆら〳〵として空と一つに融け、練れるが如き水の面に、富士の白雪ちら〳〵流れぬ。漁舟鷗よりも小なり。

村々はまだ冬枯のまゝなれど、霞低う地に這ひ、春四方に滿てり。鳶一羽悠々として山下に舞ふ。

山崖、畑の畔到る處蕗の薹青く萌え、榛の木などはすでに垂々の花をつけ、春蘭も早きは花咲きぬ。枯草枯葉の間より春は簇々として萌えつゝあり。

蕗の薹　フキのタウ。蕗の花軸をいふ。

春蘭　シユンラン。

簇々　ソウソウ。むらがるさま。

二　花月の夜

戸をあくれば、十六日の月、櫻の梢にあり。空色淡くして碧霞み、白雲團々、月に近きは銀の如く光り、遠きは綿の如く和かなり。

春星影よりも微かに空に綴る。微茫たる月色、花に映じて、密なる枝は月を鎖してほの闇く、疎なる一枝は月にさし出でてほの白く、風情言ひ盡し難し。薄き影と、薄き光は、落花點々たる庭に落ちて、地を歩す、さながら天を歩むの感あり。

微茫

風情　フゼイ。

三　涼しき夕べ

かいづ　黒鯛の幼きもの。

だぼ鯊　鯊の類。沿海、潮線附近の岩礁間に棲息す。

宿かり　節足動物中、甲殻類に屬す。

日落ちぬ。石垣に腰かけ、足を垂れつゝ釣る。前に殘照流るゝ川あり。後に青蘆さや〳〵と戰げり。

潮次第に滿ち、川逆さまに流れぬ。水澄みて水無きが如く、水底池よりも鮮かなり。小さき鰻は藻より藻にのたうち、今年生れのかいづは隊をなして水色の玉にも似たる水を游げば、其の影ちら〳〵と底に印せり。石垣の穴より出で游ぶだぼ鯊は、螯をあげて迫り來る辨慶蟹を避けて身をかはせば、小鰕は杭を抱きて這ひ登り、石垣に縋れる宿かりは、身を投ぐる樣にころ〳〵と水底に墜ち行く。

下流の方を望めば、下流却つて上流の如く、水は山影碧深く落つる邊より涼風と共に流れ來る。潮滿ち盛れば、殘照

毳々　サンサン。物の細長き樣。

鰡　鯔の幼きもの。

蕭々　セウセウ。風のもの寂しく吹く樣。

龍膽　リンダウ　龍膽科に屬する多年生草本。

の影やゝもすれば押流されむとし、小鮮群がりて水を攪すれば、水流れて其の紋を消し、毳々たる川底の藻は、水に梳られて、今にも流れ出でむとすれば、幾隊の魚苗もとゞまりかねて流れ行く。

垂れたる足の爪先に水とゞく頃は、殘照消え、潮も滿ちて淀みぬ。鰡跳ってまた水に落つる音、石を投ぐる樣なり。

四　暮秋

柿の落葉を踏みて、後山に登る。

黄茅蕭々として亂れ、龍膽の碧、棘の實の紅と徑を綴る。

山上より見れば、田は盡く苅られ、麥の綠猶ほのかにして、村も瘠せ、晩秋の野いたく寂びぬ。

烏五六羽あり、山上の樹より立ち、鳴き連れて彼方の村に向ふ。啞々の聲滿山に響く。

啞々　アア。

五　雪の日

起出で見れば、滿天滿地の雪。

午前は粉雪紛々霏々。午後は綿雪片々飄々、終日間斷なく降り暮らす。

玉屑　ギヨクセツ。ちらちら降る雪の形容。

障子を開けば、玉屑霏々亂れて斜に飛び、後山も雪の爲におぼろなり。風大いに到れば、積りし雪また亂れ立つて走る。

午後はいよ〳〵降りしきりて、馬車も通はずなりぬ。積る雪の重みに、何の木にや、ぽきりと折るゝ音するもの兩三

度。

滿天滿地一白の中、獨り前川のみ鼠色にして黑く、鷗十數羽來りて游げるあり。時々其の二三羽、水を起つて、十分に翼を擴げ、風雪に向ひて飛ばんとすれど、吹きやられ吹きやられて、空しく水に下りぬ。

盡日霏々濛々、天地雪に埋れ、人風雪に閉ぢられ、斯くて降りながら夜に入りぬ。

夜十時燈をとりて外を覗へば、飛雪猶紛々たり。

（德富蘆花―自然と人生）

宿貸せと刀投げ出す吹雪かな　（蕪村）

德富蘆花　名は健次郎。小說家。熊本縣の人。昭和二年歿。年六十。

二四　讀書の樂み

一

およそ讀書の樂みは、よろこびふかく、山林に入らずして心しづかに、富貴ならずして心ゆたけし。このゆゑに、人間のたのしみこれにかふるものなし。一日書を讀むの樂み至れるかな。聖賢の書を見て、その心を得て樂むは、たのしき事の至りなり。その次に、古の事を記せる史には、我が國は神武天皇より今年まで二千三百七十年、唐土は黃帝より今まで四千四百年の間の事を載せたり。この故に、から・やまとの史を見れば、遠き古のあと、目のあたりに明かに見え

心ゆたけし

二千三百七十年　寶永七年。

黃帝　支那上古の皇帝。

て、わが身宛もその世に遭へる心地して、數千年の齡を保てるが如し。この樂みも亦大いなるかな。今日の前なる事のみを見て古の書を知らざるは、極めてかたくなし。古き書を見ず、古の道を知らざる人は、萬の理に暗く、諸〻の事を知らず、夢見て覺めざるがごとく、迷ひて一生をすごす。これ大いなる不幸なるかな。凡そ古今の書に通じて、理を極め事を知らば、わが心の中、萬物の理、見る事聞く事に疑なくして、大いなる樂みなるべし。古の史を知らずんば、から・やまと・古今・天地の中にみちく〳〵たる理も事も、皆通ぜずして、暗しといふべし。

四時に隨ひ、月花を翫び折々の景物を愛で、その折節にか

翫ぶ　モテアソぶ。

左氏が書　春秋左氏傳をいふ。

五字の句　詩のことをいふ。

なひたる、唐の大和の古き歌を誦して心に樂まんこそ、自ら作る勞なく、たやすくして、いと面白きわざなるべけれ。もろこしの古、その才餘りありし人も、時に臨みて、その折にかなへる古き詩をかれこれ引きて、その情を敍べしためし、左氏が書などに多く載せたり。これわが作らんより、古めかしく、理まさりて、人を感ぜしむる事深かりしにや。古の事法とすべし。我が如き輩、才拙くて詞を巧にせんとする苦み、いと煩はしく覺ゆ。もし天才ある人、たやすく作り出ださんは、興あるべし。されどそも五字の句を吟じ成して、一生の心を用ひ破るは益なし。

およその事、友を得ざれば爲し得べからず。唯讀書の一

天下四海の中

至樂　シラク。

三餘　讀書に最も適當なる冬と夜と陰雨の時との稱。

事は、友なくてひとり樂むべし。一室の內に居て、天下四海の中を見、天地萬物の理を知る。數千年の後にありて、數千年の前を見る。今の世にありて、古の人に對す。わが身愚にして、聖賢に交はる。これ皆讀書の樂みなり。およそ萬のことわざの中、讀書の益に如く事なし。然るに世の人これを好まず。その不幸甚だし。これを好む人は、天下の至樂を得たりといふべし。

二

四時につきて、いつともわかず、ふるきふみ見ることを樂みつねにしてやむべからず。なんぞ只三餘の時にかぎるべきや。春・夏は日の長きを愛し、秋・冬は夜のながきをよろ

こぶ。折を得て樂むべし。日ながけれど事しげく、客おほければいとまなし。夜はしづかにして書を見るに功多し。およそ、日ひと日夜ひと夜、ふみ見る益は、いかなる富貴の樂みにもかへがたし。經傳をよめば、見るたびに聖賢の教をまのあたり聞くが如し。たふとぶべきことかぎりなく、空しく過ぎぬる隙をしむべし。狄仁傑の「名教の内至れる樂みあり、なんぞ俗人とかたることを好まんや。」といへるもうべなり。

（貝原益軒―益軒十訓）

狄仁傑　唐の名臣。則天武后に仕へて大功あり。
名教　聖人の教。
貝原益軒　名は篤信。筑前（福岡縣）の人。正德四年歿。年八十五。（一二九〇―一三七四）
益軒十訓　益軒の教訓書中の主なるもの十種を集めて一冊としたるもの。

昭和十年十月十日水曜日六時限終了。

二五　白虎隊

明治戊辰ノ歳、德川慶喜、會桑二藩ノ兵ヲ率ヰテ將ニ京ニ上ラントシ、伏見・鳥羽ニ戰ヒテ大イニ敗ル。

明治戊辰ノ歳、德川慶喜、率ヰテ會桑二藩之兵ヲ將ニ上ラントシ京ニ、戰ヒテ於伏見・鳥羽ニ大敗ス。

遂ニ海路ヲ經テ江戸ニ還ル。茲ニ於テカ天下靡然トシテ王風ニ歸ス。然レドモ東奥ノ諸藩、嵎ヲ負ヒテ從ハザラント欲スルモノアリ。大軍興リテ之ヲ伐ツ。諸道竝ビ進ミ、嚮フ所皆從フ。獨リ雄藩會津、天嶮ト人和トニ賴リテ敢ヘテ降ラズ。悉ク藩中ノ老少ヲ發シテ、四隊ヲ成シ、兵武ヲ

明治戊辰ノ歳　明治元年。
會桑二藩　會津・桑名の兩藩。
伏見・鳥羽　京都市にあり。
靡然　ビゼン。なびきしたがふさま。

朱雀　四方の星の中で南方に位するもの。
玄武　北方に位するもの。
青龍　東方に位するもの。
白虎　西方に位するもの。

練リテ、孤城ヲ守ル。隊ハ名ヅケテ朱雀・玄武・青龍・白虎トイフ。蓋シ天ノ四方ニ象レルナリ。就中白虎隊ハ年少ノ子弟ヲ以テ之ヲ編ス。隊士皆十六七歳、體貌未ダ熟セズト雖モ、意氣壯者ニ超エタリ。敵ヲ四圍ニ受クルニ及ビ、軍規愈〻嚴ニシテ、慨然トシテ天ヲ衝カント欲ス。

白虎隊記念碑（ムッソリーニ氏寄贈）

松平容保　會津藩主。容敬の嗣子。明治二十六年歿。年五十八。

衆寡敵セズ

八月二十二日、城主松平容保、兵ヲ率ヰテ瀧澤村ニ到リ、戸ノ口原ニ戰フ。白虎隊モ亦之ニ從フ。勇戰力鬪シ、一善ク十ニ當ル。然レドモ衆寡敵セズ、兵ヲ收メテ城ニ歸ラント欲ス。尾擊急ニシテ隊列亂ル。白虎隊士既ニ本隊ヲ失ヒ、道塞リテ城ニ入ルコトヲ得ズ。乃チ間道ニ由リテ纔カニ飯盛山ニ上ル。數ハ則チ十有九士。時ハ則チ二十三日。刀槍ヲ杖ツイテ聲ヲ勵シ、松樹ニ倚リテ城ヲ望ム。城ハ是レ若松城、舞鶴ト號ス。白堊聳エ、翠松繞ル。砲殷々、城市焚カル。城隱々、焔煙起ル。隊士等以爲ヘラク、城已ニ陷レリト。相擁シテ悲憤シ、君父ヲ憶ヒテ慷慨ス。遂ニ悉ク自刃シテ死ス。

飯盛山　若松市の東方にあり。
白堊　ハクアク。ハクアは訛り。白壁のこと。
殷々　インイン。音の盛んなるさま。
松籟　ショウライ。松風のこと。
颯々　サツサツ。風のさつとふく形容。

嗟、白虎隊十有九士、年少故園ノ難ニ赴キ、節義ニ殉ズ。飯盛山頭、松籟颯々トシテ長ヘニ英風ヲ傳フ。

かぼそい　細い。
めいるやうに

自修文

一　子犬

嬉しいにつけ悲しいにつけて、憶ひ出すのはポチの事だ。

忘れもせぬ、祖母の亡くなつた翌々年の、春雨のしと〳〵と降る、薄ら寒い或夜のことであつた。私は例の通り、宵の口から寝てしまつたが、ふと目をさますと、遠くでかすかにきやん〳〵といふやうな聲がする。不思議に思つて、耳を澄ましてゐると、次第に大きく高くなつて、つひには確かに門前に聞える。疑もなく、小犬の啼聲だ。時々咽喉でも締められる樣にけたゝましく、きやん〳〵と啼立てる。其の聲尻がやがてかぼそく悲しげになつて、めいるやうに、遠い〳〵處へ消えて行く。と思へば、忽ち又近くで堪へきれぬやうに啼出して、くん〳〵と鼻をならすやうな時もあり、ぎやおと欠伸をするやうな時もある。

欠伸　アクビ
馴染　ナジミ。なれしたしむこと。
いたいけ　痛はしいこと。

私は元來動物好きで、わけても犬は大好きだから、近處の犬は大抵馴染だ。けれども、こんなかぼそいいたいけな聲で啼くのは、一匹も無い筈だから、不思議に思つて、そつと夜著の中から首を出すと、

「どうしたの。寝られないのかえ。」

と、母が寝返りを打つて、こちらを向いた。私は此の返答をさし措いて、

「あれは白ぢやないねえ、お母さん。もつと小さい犬の聲だねえ。どうしたんだらう。」

「棄犬さ。」

「棄犬つて、なあに。」

「棄犬つて……誰かゞ棄てゝいつたのさ。」

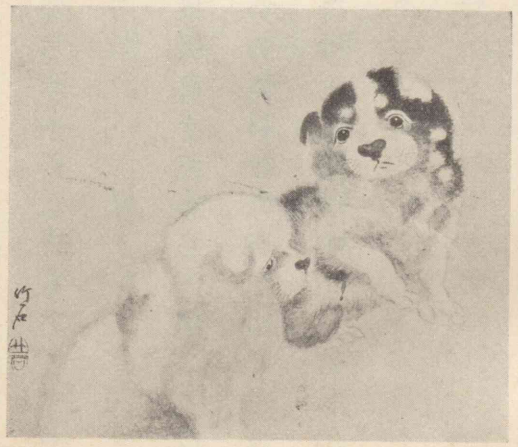
私はしばらく考へて、

「誰が棄てゝいつたんだらう。」

「大方何處かの……何處かの人さ。」

何處かの人が犬を棄てゝいつたと、私は二三度繰返して見たが、分らない。

「どうして棄てゝいつたんだらう。」



犬　こ　ろ

擡ぐ　モタゲ。

たわいなく

母は「うるさいよ。」ともいはないで、何處までも相手になり、其の意味を説明してくれて、

「まうおそいから默つておやすみ。」

と、優しく言つて、彼方を向いてしまつた。

私も亦夜著を被つた。犬は門前を去つたのか啼聲が稍〻遠くなる。寢られぬまゝに、私は夜著の中で、今聽いた母の説明を繰返し繰返し味はつて見た。まづ何處かの飼犬が緣の下で兒を產んだとする。小さなむく〳〵したのが重なり合つて、首を擡げて、みいみいと乳房を探してゐる處へ、親犬が餘處から歸つて來て、そのそばへどさりと横になり、片端から抱へ込んで、べろ〳〵舐めると、小さいから舌の先でたわいもなくころ〳〵と轉がされる。轉がされては大騷ぎして起返り、又よち〳〵と這ひよつて、ぽつちりと黑

鼻面
ハナヅラ。

産毛
ウブゲ。

い鼻面で、お腹を探り廻り、漸く思ふ柔かな乳首を探り當てゝ、あわてゝちゆうと吸附いて、小さな兩手で揉立て〳〵吸ひだすと、甘い溫かな乳がどく〳〵と出て來て、咽喉へ流れ込み、胸を下つて何とも言へずおいしい。と、腋の下からまだ乳首にありつかぬ兄弟が、鼻面で割込んで來る。とられまいとして、産毛の生えた腕を突張り、大騒ぎをやつてみるが、到頭とられてしまひ、又そこらを尋ねて、他の乳首に吸附く。其の中にお腹も一杯になり、親の肌で身體が溫まつて、融けさうな好い心持になり、ついうと〳〵となると、くゝんだ乳首が脱けさうになる。夢心地にもあわてゝ、又吸附いて、一しきり吸立てるが、直ぐに又たわいなくうと〳〵となつて、乳首がつひに口を脱ける。脱けても知らずに口を開いて、小さな舌を出したなりで、一向正體がない。

足搔
アガキ。

濡れしよぼたれ
濡れて雫のたるること。

其の時忽ち暗闇から、もじや〳〵と毛の生えた、節くれ立つた大きな腕がぬつと出て、正體なく寢入つて居る所をむづと引つ撮み、宙に吊す。驚いて目をぱつちりあき、いたいけな聲で悲鳴をあげながら、四足を張つて藻搔く中に、頭から何かで包まれたやうで、眞暗になる。窮屈で息が詰りさうだから、出ようとするが、出られない。しばらく藻搔いて居る中に、ふと足搔が自由になる。と、襟元を撮まれて、高い〳〵處からどさりと落された。うろ〳〵としてそこらを見廻すけれど、何だか變な寂しい眞暗な處、誰も居ない。茫然としてゐると、雨に打たれて、見る間に濡れしよぼたれ、怖ろしく寒くなる。身慄ひ一つして、くん〳〵と親を呼んで見るが、何處からも出て來ない。途方に暮れて、よち〳〵這出し、雨の夜半を唯ひとり、溫かな親の乳房を慕つて、悲しげに啼き廻る聲が、先刻一度

居たゝまらない　ぢつとしてゐられないこと。

絶入る　息が絶えること。

門前へ來て、又何處へかさまよつていつたやうだつたが、それが何時か又戻つて來て、何處をどう潜り込んだのか、今は啼聲がまさしく玄關先に聞える。

「お母さん、お母さん、門の中へ這入つて來たやうだよ。」

と、私が何だか居たゝまらないやうな氣になつて、又母に言掛けると、母は氣の無ささうな聲で、

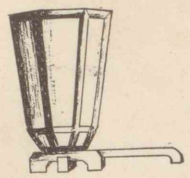
「さうだね。」

「出て見ようか。」

「出て見ないでも好いよ。寒いぢやないかね。」

「だつて、あら、あんなに啼いてゐる。」

と、折から聞える絶入りさうな啼聲に、私は我知らずむつくり起きあがつたが、何だか一人では怖いやうな氣がして、



雪洞　ボンボリ。おほひをかけ、柄のついた手燭。

掉る　フる。

「よう、お母さん、行つて見よう。よう。」

「本當に仕樣がない兒だねえ。」

と、口小言を言ひ〳〵、母もしぶ〳〵起きて、雪洞を點けて立ちあがつたから、私も其の後について、玄關と云つてもつい次の間だが、玄關へ出た。

母が靴脫へおりて、格子戸の掛金を外し、がらりと雨戸を繰ると、颯と夜風が吹きこんで、雪洞の火がちら〳〵と靡く。其の時小さな鞠のやうなものが、つと軒下を跳び退いたやうだつたが、やがて雪洞の火先が立直つて、一道の光がさつと戸外の闇を破り、雨水の處々に溜つた地面を、一筋細長く照らし出した處を見ると、つい其處に、生後まだ一箇月も經たぬ、むく〳〵と太つた、赤ちやけた小犬が、小指ほどの尻尾をちぎれさうに掉立てゝ、此方を見上げてゐる。

なりは私が寢て居て想像したよりも大きかつたが、果して全身雨に濡れしよぼたれて、泥だらけになり、だらりと垂れた割合に、大きい耳から雫を滴らせ、ぱつちりと二つの眼を青貝のやうに竝べて光らせてゐる。

青貝　青色に光る美しい貝。螺鈿のこと。

「おや〳〵、まあ、可愛らしい。」

と、母もつい言つてしまつた。況んや私は犬好きだ。ぢつとして見ては居られない。母の袖の下から首を出して、ちよつ〳〵と呼んで見た。

すると、さほど怖れた樣子もなく、ちよこ〳〵と側へ來て、流石に少し平べつたくなりながら、頭を撫でてやる私の手を、下からぐいぐい推上げるやうにして、べろ〳〵と舐め廻し、手をくれるつもりなのか、頻りに圓い足を擧げて、ばた〳〵やつてゐたが、果はやんは

りと痛まぬほどに小指を咬む。

咬む　カむ。

私は可愛くて可愛くてたまらない。母の顏を見上げながら、少し鼻聲を出して、

「お母さん、何か遣つて。」

「遣るのも好いけれども、居附いてしまふと、仕方がないからねえ。」

と、口では拒むやうな事を言ひながら、それでも臺所へ行つて、缺けた茶碗に冷飯を盛つて、何かの汁を掛けて來てくれた。

嗅ぐ　カぐ。

早速靴脫へ引入れて之を當てがふと、小犬は一寸香を嗅いで、すぐうまさうに、まづぴちや〳〵と舐めだしたが、汁が鼻の孔へ入ると見えて、時々くしん〳〵と小さな嚏（くさめ）をする。忽ち汁を舐めつくして、今度は飯に掛かつた。他に爭ふ兄弟も無いのに、頻りに小言を言ひながら、がつ〳〵と食べだしたが、飯は未だ食べなれぬかし

て、兎角上顎に引附く。首を掉つて見るが、そんな事ではなか〳〵取れない。果は前足で口の端を引掻くやうな眞似をして、大藻掻きに藻掻く。

此の隙に、私は母と談判を始めて、

「今晩一晩泊めて遣つて。」

と、雪洞を持つた手にぶらさがる。母は一寸澁つたが、まうかうなつては仕方がない。

「お父さんに叱られるけれど。」

と言ひながら、詰り棧俵法師を捜して來て、靴脫の隅に敷いて遣つた。それは好かつたが、其の晩一晩啼きとほされて、私はちつとも知らなかつたが、お蔭で母は父に小言を言はれたさうな。

犬嫌ひの父は、泊めたその夜を啼き明かされると、うんざりして

棧俵法師　サンダラボウシ。米俵の上下にふたとして用ひる藁にて作れる圓く平たきもの。

しまつて、翌日は、是非逐出すと言出したから、私は小犬を抱いて逃廻つて、どうしても放さなかつた。父は困つた顏をしてゐたが、しかしそれも一時の事で、そのうちに小犬も獨寢に慣れて、夜も啼かなくなると、逐出す筈のものに何時しかポチといふ名まで附いて、姿が見えぬと、父までが一緒に捜すやうになつてしまつた。

（二葉亭四迷―平凡）

二葉亭四迷　長谷川辰之助。小說家。東京外國語學校出身。東京の人。明治四十二年歿。年四十八。

道行ぶりにむかうより來る者を見れば、百八の數珠を首にかけ、高野笠のやうなるを著てあゆむ者あり。うつけ者これを見附け、手を打つて感ずる。「そなたが著たる笠は事の外大きいことや。何としてその數珠をば、うなじに懸けられた。」と問ふ。「いや、これはまづ數珠を首に懸けて後に、笠を著て候。」というたれば、「とかく物をば聞かいでは。」と。

（醒睡笑）

二　手品

或日、大友の家に遊びに行くと、大友の兄さんの直太郎さんが出て來て、

「今日はこれまでにない面白い手品をやつて見せるが、若し其の種が解つたら、何でもやる。」

と、言はれた。二人は雀躍して直太郎さんの部屋へ行つて見ると、白い厚紙の大きな箱の一方は開いて居るのが横に倒してある。直太郎さんは其の開いた方に坐つて、勿體らしく言はるゝには、

「さあ〳〵御覽じろ。只今此の箱の上に縫針を十本許り置きます。指一本も出さないで、此の針が躍りだしたら不思議、さあ〳〵良く氣を附けて御覽じろ。」

雀躍

勿體らしく

と、箱の中から針を澤山出して置いたが、直太郎さんは右の手を箱の中に入れて、ごそ〳〵と厚紙の裏を摩ると、厚紙の上の針が行列をして前後左右に動き始めた。私共は眼を圓くして見て居ると、今度は針が一本一本に縱に連つて長い一本の絲のやうになり、それがぐる〳〵と輪のやうに廻り始めた。

「さあ〳〵、縫針は縫絲と變り、今度は又縫針に逆戻り！」

と、直太郎さんは大得意で、厚紙の裏をごつりと一つ打つと、連つて居た針がばら〳〵になつてしまつた。

「如何だね、不思議だらう。種を見せてやらうか。」

と、直太郎さんが言ふので、私共は、

「なあに見せてもらはなくつとも宜しい。」

と、二人で縫針を手に取り、何か著けてはないかと檢査したが、別に

糊も飯粒も著いて居ない。そこで、私は手に取つた針を何心なく箱の縁の方に置いたら、忽ち其の針が他の針の處に飛んでいつた。これを見て、大友も私も開いた口が塞がらない。

「さあどうだ。種を見せようか。」

と言ひながら、直太郎さんは箱の下から出して見せたのが、握拳程の黒い石であつた。直太郎さんは、

「これは磁石石といつて、鐵を吸ひ寄せる力を持つて居るのだ。磁石のことはお前達も學校で教はつたらう。併しこんな石を見たのは初めてだらう。」

と云つて、それから其の石で釘や鋏の小さいのまで吸ひ著けて見せてくれた。釘など三寸も離れて居て、石に飛びついた。堪り兼ねて、大友は、

方便山　山口市の西北にあり。東西二峰に分れ、海拔各〻七四〇米。

羅針盤　方角を示す器具。特に艦船の航行の際に用ふ。

「兄さん、こんな石は何處にありますか。」

「そら、さうくるだらうと思つた。この石は東方便山の絶頂にあるのだ。併し容易なことでは採れはしない。針や羅針盤や、鐵槌を持つて行つて、拾つたり、缺いて取つたりした石を一々試驗して見なければならぬ。ところが絶頂は磁力が充滿して居るから、針を附けて見ても一寸は判斷が出來ないのだ。拾つた石を麓まで下りて試驗して見ると、運が良ければ磁力のある石を得るし、運が悪いと二十も三十も拾つた石が悉く唯の石のことがある。この石だつて、友達が先週の日曜に採りに行つて、やつと二個程拾ひ當てたのを、兄さんが無理に貰つて來たのだ。」

この話を聞いて私共は愈〻この石が有難くなり、どうかして、我々も一つ拾つて來たいといふ考を起した。そこで、二人は相談をし

絶好　非常によいこと。

て、今度の日曜にはたゞ二人、朝から東方便山に登り、どうにかして、その石を拾つてこようと、内々其の支度をして日曜の來るのを待つてゐた。

若葉の時候であるから山遊びには絶好の時だ。併し私共は方便山のやうな高山に登るのは初めてゞあつたから、お互に内心不安であつたが、頂が眼の先に見えるだけ、近いやうに思はれて、勇氣を鼓して、軍歌を唱ひ、杖を打振りながら野路を急いだ。

二人とも風呂敷包を一つづつ、これは握飯を包み、歸路には磁石石をうんと包んで肩にかつぐ積り、又各〻鐵槌を一挺、縫針は母の針箱から持出し、羅針盤は手に入れることが出來ないので諦めた。

途は上りつ下りつして、しかも次第に登りゆくのであるが、さて行けども〳〵頂と自分等との距離は同じやうだ。

二人は時々路傍の石に腰かけて休んだ。其の度に石を拾つては縫針を著けて見たが、吸著く處か、彈き返しさうな石許りだつた。

其の中に頂も稍〻近づいて、今一呼吸と思ふ時、ぽつりと大粒の雨が顔に當つたので、驚いて頭をあげると、眞黑の雲が手の屆くかと思ふ處に垂れて居る。今更二人は顔の色の變るまで驚いた。そして四方を見渡すと、一帶は見るからに物凄い光景と打變り、今にも大荒に荒れさうな樣子である。

「如何しよう。」

と、大友は言つた。

「どうせ濡れるなら頂上まで行かう。一つ採つて歸らうぢやないか。」

と、私は口惜しさうに叫んだ。

進退谷まる

究竟一　クツキヤウイチ。

滴々　テキテキ。水がつゞいてしたゝるさま。

そこで、二人は一直線に途でない處をたゞ絶頂めがけて進んだ。本道は急ではなかつたが、直線に進んだ爲に手で草を握りながら這ひ登らなければならぬやうになつた。雨は益〻ひどく降つて來る、風は加はつて來る、山は鳴つて來る、雲は濛々として、四方を閉ぢ、方便の頂すら見えなくなつて來た。

流石に二人は進退谷まつてどうすることも出來ない。ところが思ひかけなく二三間横の方に大きな穴がある。此の穴を見るや究竟一と、忽ち駈けこんでしまつた。

穴は大人が這入れる位の大きさで、奥は何百間あるか分らない。口から二三間の奥は滴々として水の滴るのを聞く許りである。私はこは〳〵ながら奥の方を見た。

私共は暫く雨の小止みになるのを待つてゐたが、なか〳〵勢ひは強くなるばかり、止みさうもない。そこで二人は思案を定め、握飯を出して食ひ始めた。

兎も角、二人は握飯を食ひ終つた。そこで直ぐ麓をさして駈下りることにきめたものゝ、得物一個拾ふことの出來ないのは、如何にも殘念ゆゑ、穴の周圍を探して黑色の似つかはしい石を十個以上も拾つたらうか。それを風呂敷に包んで肩に擔いで、麓をさして駈足！進め！で逃げだした。進めではない、退けだ。

恰度麓の雜木林に小屋があつたのを幸ひ二人は駈込んだが、これは雨を避ける爲ではなく、肩に擔いでゐる石から磁石石を選り出す心算である。

びしよ濡れになつてゐたが、駈けた爲に汗が流れて、身體は燃えるやうだ。二人は少時休息して、さて石を選り始めた。選んでゆ

落膽（ラクタン。）

濡鼠

く中に一個として本物らしいのはないので二人は落膽したが、稍〻磁力のありさうに思はれたのを一個宛殘して置いて、それをせめてもの心やりに、濡鼠のやうになつて疲れた足を曳きずりながら家へ歸り著いたのは、日の暮るゝに間もなかつた。

私は家に歸るや、湯に入れてもらひ、夕食を終つた時には、疲れが出て身體は綿のやうであつたけれども、ひそかに自分の部屋の電氣の下で、例の一個の石を机の上に乘せ針を著けてみた。針は愚か、塵も著かなかつた。

翌日、學校で大友に檢査の結果を聞くと、同じことで二人とも何の得る處もないのが分つた。餘り殘念だつたから誰にもこれを言はない。併し二人は、近々是非とも絶頂を極めて目的を達せずんば止まない決心だつた。

一週間經つて、今日こそと二人は又もや朝早くから家を飛出した。

頂上に達した時の嬉しさは喩へやうがない。見渡すかぎり空は蒼々と晴れ、風はそよ〳〵と吹いて汗になつた身體に心地よく吹きつける。二人はきよろ〳〵と四方を見廻す。其處らの石が悉く磁石石のやうに見える。一時間許り二人は夢中になつて或は拾ひ、或は鐵槌を以て土地の底に隱れて居る岩角を缺き取つた。殆ど擔ぎきれぬ程の石を二人は肩に荷うて、先日休んだ麓の小屋まで歸り丁寧に檢査した。私は先づ大きな石を試驗して見た。併しそれは唯の石だつた。次に長方形の石を取つて釘の上に置いて見たら、二寸ばかり離れた處から飛著いたので、思はず、

「萬歳！」

と、叫び躍りあがると、大友も續いて、

「萬歳！」

と、躍りたつた。見ると私の石よりか形も倍大きく、そして重い鐵槌がぶらりと下がる程磁力を持つて居たのであつた。遂に九個程選り分けて今度は意氣揚々と家に歸つた。

私は父母や姉や妹の前で色々の手品をやつて見せて、第一に妹を驚かしたが、父は笑つて見て居る許りで、少しも驚かなかつた。私が厚紙の上に長い釘を置いてそれをぐる〳〵と廻しながら、

「さあ〳〵これが蛇の巣籠りでござあい。」

と言つたら、母と姉とがふきだした。

其の翌日、學校での大友と私との得意と言つたらなかつた。

（國木田獨歩―國木田獨歩全集）

意氣揚々

國木田獨歩　幼名龜吉。後哲夫と改む。小説家。千葉縣生。明治四十一年歿。年三十八。

三　歸　省

學生生活中、最も樂しきものゝ一は歸省なり。指折屈めて其の日を待ち佗び、行李の整理に忙し。空想はそれからそれへと連鎖の如く涌きて、弟妹を懷ひ、某の山、某の水を思ひ、田園の朝を懷ひ、團欒の夕べを想ふ。鎭守の森、屋後の西瓜、盡く夢寐の裡に入りて、一に神飛び魂往くの料に非ざるはなし。樂しいかな、歸省。

冬季休暇は短く、特に都が正月なるに反して、故國は寂寥たる冬枯なり。春の休はあわたゞしく過ぎて、歸省の其の趣を味はふに由なし。されば歸省の味は夏季休暇にあり。二箇月餘の休暇は十分に其の味を會得すべし。數旬の休暇は決して無意味なるものに非ず。

歸省　キセイ。家に歸りて親の安否を問ふこと。

團欒　ダンラン。親しき集り。

夢寐の裡　ムビ。夢の間、夜の間。

寂寥　セキレウ。さびしきこと。

歸省とは歸り省みるなり。歸は其の家に歸るを云ひ、省は視なり、察なり、父母の安否を視察するを云ふ。されば歸省の意義は、自己が遊ばんが爲に歸るをいふに非ずして、父母の安否を候し、其の膝下に侍して孝養を盡すべきを云へるなり。然るに事實は往々にして反し、歸りて二旬ならずして、子は歸省の面白くなきを嘆ず。これ畢竟我儘の致す所なり。

畢竟　ヒツキヤウ。つまるところ。つまり。
シーズン　Season　時季。
放縱　ハウシヨウ。わがまゝ。
怠惰　タイダ。なまけおこたる。
蔑視　ベツシ。見下すこと。

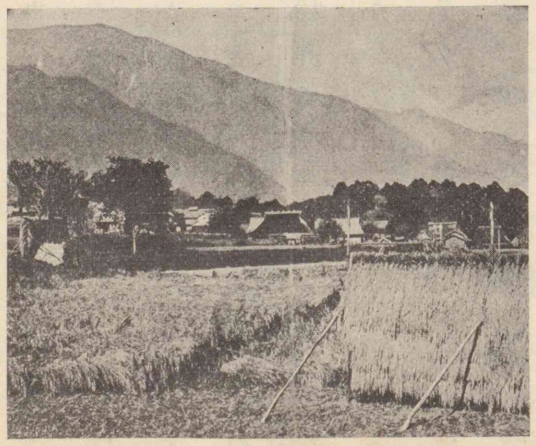
歸省は、家庭の團欒的趣味を味はふべき時なり。田園生活の眞趣を會得すべき時なり、精神と肉體との修養をなすべき時なり、學校生活をなせるが故に、久しく家庭の團欒的趣味を缺く。歸省は其の暖き趣味に還るべき好きシーズンなり。都會の生活に馴れたる身は、清き田園の空氣を飽くまで呼吸すべし。歸省の際は放縱の季に非ず、怠惰の時に非ず。暴飲暴食の時期に非ず、制度を蔑視し規則を度外すべき期節に非ず、我が肉體の攝生を忘れざるとともに、精神を休養し他日の勉强に資すべきを忘るべからず。

度外　ドグワイ。のけもの。
攝生　セツセイ。身體を養ふこと。

歸省して其の舊師を訪ふもの、果して幾人ありや。小學校には嘗て自分を薫陶したる先生あるべく、此等の諸先生を訪問するは、其の舊恩を謝するは固より、相對して舊を話し新を談ずれば、其の間に精神的修養を得ること少々に非ず。溫乎たる其の容に接すれば一道の春風吹き到るを覺ゆべし。

薫陶　クンタウ。教育すること。
溫乎　ヲンコ。あたゝかな。
一道の春風

今の學生は師弟の情味を解し得ず。然るに師弟の情味は、斯か



山麓の村

鄉黨　キヤウタウ。

笹川臨風　名は種郎。文學博士。東京の人。明治三年生。

る裡に於て自ら解し得らるべきなり。自己の智能が向上したりとて舊師を慢り鄉黨を慢り、長者を慢り、都會風を吹かして、田園生活を蔑視せんとするが如きものあらば、其の當人が鼻摘みとなるは論なし、後進子弟進學の路を塞ぐ妨害となるべし。自己は唯一個の自己に非ずして、鄉黨の自己たるなり、學校の自己たるなり、先輩に對しては後輩の自己たるなり、後進に對しては先進の自己たるなり。其の一言一行は、直ちに模範ともなるべく、惡例ともなるべし。責任は決して輕しとすべからず。

數旬の歸省をして無意味に終らしむべからず。休暇の畢るとともに、あゝつまらなかつたと後悔すること勿れ。之を意味あるものとなし、之をつまるやうにするは歸省者當人の了簡にあり、やりやう如何にあり。

（笹川臨風―男性美）

主要象形文字表

國語假名遣表

ゐ

最モ少キゐヲ語記スベシ。其ノ外ハいカひナリ。

ゐ（井・堰）
ゐなか（田舍）
ゐもり（蠑螈）
ゐ（居）
ゐざり（膝行）
ゐしき（臀）
かもゐ（鴨居）
しきゐ（閾）
くもゐ（雲居）
くらゐ（位）
しばゐ（芝居）
とのゐ（宿直）
とりゐ（鳥居）
まとゐ（團欒）
もとゐ（基）
ゐ（猪・亥）
ゐくび（猪頸）
ゐのこ（豕）
ゐのしし（猪）
いぬゐ（乾）
ゐ（藺）
ふとゐ（莞）
あゐ（藍）
くれなゐ（紅）

い

あぢさゐ（紫陽花）
うないゐ（髫髮）
かたゐ（乞食）
くゐゐ（慈姑）
せゐ（所爲）
ないゐ（地震）
ゐる（率）
ひきゐる（率）
もちゐる（用）
まゐる（參）

語頭ニテハい・ゐガ紛レ易シ。前掲ノゐノ外ハ皆いナリ。

語中・語尾ニテハい・ゐ・ひガ紛レ易シ。前掲ノゐト左記ノいノ場合ノ外ハひナリ。

おい（老）
くい（悔）
むくい（酬）
音便（き・し）ガ（い）トナルモノ。
しいじ（四時）
しいか（詩歌）
むいか（六日）
さいはひ（幸）
たいまつ（松明）
ついぢ（築地）
ついたち（朔）
ついたて（衝立）
ついで（序）
ひいき（贔屓）
やいば（刃）
かうがい（笄）
きさい（后）
かいて（書きて）
さいて（指きて）
ないて（泣きて）
あしい（惡しし）
おもい（重し）
かなしい（悲しき）

ゑ

ゑじ（衞士）
ゑぼし（烏帽子）
ゑんじゆ（槐）
こゑ（聲）
すゑ（末）
こずゑ（梢・木末）
つくゑ（机）
つゑ（杖）
ゆゑ（故）
ゆゑん（所以）
ゑむ（笑）
ゑがほ（笑顏）
ゑくぼ（靨）
ゑつぼ（笑壺）
ゑふ（醉）
ゑる（彫）
ゑぐる（刳）
うゑる（飢・餓）
うゑる（植）
すゑる（据）
すゑもの（陶器）
いしずゑ（礎）
ゑぐし（鹼）

少數ノゑヲ語記スベシ。其ノ外ハえカへナリ。

ゑ（繪）
ゑがく（畫）
ゑどる（彩）
ともゑ（巴・鞆繪）
ゑ（餌）
ゑづく（嘔吐）
ゑ（穢）
ゑど（穢土）

語頭ニテハゑ・えガ紛レ易シ。前掲ノゑノ外ハ皆えナリ。語中・語尾ニテハゑ・えガ紛レ易シ。前掲ノゑト左記ノえノ場合ノ外ハへナリ。

え（兄）
きのえ（甲）
ひのえ（丙）
つちのえ（戊）
かのえ（庚）
みづのえ（壬）
え（枝・柄）
しずえ（下枝）
ずはえ（條）
ながえ（轅）
え（江）
ふえ（笛）
のどぶえ（吭）
ぬえ（鵺）
ひえ（稗）
ひえどり（鵯）
さざえ（螺螺）
あえる（肖）
あまえる（甘）
いえる（癒）
いばえる（嘶）
おびえる（脅）
おぼえる（覺）
きえる（消）
きこえる（聞）
こえる（越）
こえる（肥）
こごえる（凍）
すえる（饐）
はえる（映）
ゆふばえ（夕映）
はえる（生）
ひこばえ（蘖）
ふえる（殖）
ほえる（吠・吼）
みえる（見）
もえる（燃）
もえる（萌）
もえぎ（萌黃）
もだえる（悶）

を

語頭ニテハお・をガ紛レ易シ。左記ノ外ハおナリ。

を（男・雄・夫・牡）
をす（牡）
をつと（夫）
をとこ（男）
をひ（甥）
たけを（猛男）
ますらを（丈夫）
みやびを（風流男）
めをと（夫婦）
ををし（雄々）
を（小）
をぢ（伯父・叔父・老翁）
をば（伯母・叔母）
をとめ（少女）
を（峯・岑）
をのへ（峯上）
を（尾）
をばな（尾花）
を（緒）
をどし（緘）
を（麻・苧）
をけ（桶）
をさ（筴）
をだまき（苧環）
をか（岡・丘・陸）
をかぼ（陸稻）
をぎ（荻）
をけら（朮）
をこ（愚・痴）
をこがまし（痴）
をこぜ（騰）
をさ（長）
をし（鴛鴦）
をしかは（韋）
をそ（獺）
をち（遠）
をちこち（遠近）
をととし（一昨年）
をととひ（一昨日）
をとり（囮・媒鳥）
をの（斧）
をみな（女）
をみなへし（女郎花）
をり（檻）
をり（節）
をろち（大蛇）
をがむ（拜）
をかす（犯・冒）
をさむ（治・修・收・藏・納）
をしふ（教）
をどる（踊・跳・躍）
をののく（慄）
をはる（終・卒・了）
をめく（叫）
をる（居）
をる（折）
をしき（折敷）
しをり（栞）
しをる（萎）
つづらをり（九十九折）
をかし（可笑）
をさなし（幼）
をし（惜）
をさをさ（大抵）

語中・語尾ニテハおハ用ヒズ。を・ほガ紛レ易シ。

左記ノ外ハ皆ほナリ。

あを（青）
あをがひ（青貝・螺鈿）
いさを（功・績）
うを（魚）
かつを（鰹）
ひを（氷魚）
さを（竿・棹）
たをやか（嬋妍）
たをやめ（手弱女）
とを（十）
ばせを（芭蕉）
みさを（操）
みを（澪・水脈）
みをつくし（澪標）
わざをぎ（俳優）
かをる（香・薫）
しをる（萎）
まをす（申）
しをらし（可憐）
やをら（徐）

ふノ假名ヲ**を**ト發音スル場合。

あふひ（葵）
あふぐ（仰）
あふぐ（煽）
あふぎ（扇）

わ

語中・語尾ニテハ**わ**・**は**紛レ易シ。左記ノ外ハ**は**ヲ用フ。

あふる（煽）
あふち（楝・樗）
あふみ（近江）
とほたふみ（遠江）
きのふ（昨日）
けふ（今日）
さふらふ（候）
たふる（仆・倒）
たふとし（貴）
はふる（投）
ふくろふ（梟）
かげろふ（陽炎）

あわ（泡・沫）
みなわ（水沫）
いわし（鰯）
うらわ（浦回）
くつわ（轡・口輪）
くるわ（郭）
くわゐ（慈姑）
ことわざ（諺）
ことわり（道理）
こわいろ（聲色）
こわね（聲音）
こわだか（聲高）

ぢ

少數ノぢヲ語記スベシ。左記ノ外ハじヲ用フ。

ぢ（父）
をぢ（伯父・叔父・小父）
ぢ（路）
こうぢ（小路）
みそぢ（三十）

さわやか（爽）
しわ（皺）
しわむ（皺）
たわやか（嬋妍）
たわやめ（手弱女）
たわら（俵）
のわき（野分）
はらわた（腸）
ひわ（鶸）
あわつ（周章）
あわただし（倉皇）
うわる（植）
かわく（乾・渇）
ことわる（斷・理）
さわぐ（騒）
すわる（坐）
たわむ（撓む）
しわし（吝）
よわし（弱）

よそぢ（四十）
あぢ（味）
あぢ（鯵）
あぢさゐ（紫陽花）
うぢ（氏）
かぢ（梶）
かぢ（鍛冶）
ひぢ（泥）
ふぢ（藤）
くぢら（鯨）
こうぢ（麹）
ことぢ（琴柱）
すぢ（筋）
ひぢ（臂）
なんぢ（汝）
ねぢ（螺旋）
ねぢく（拗）
もみぢ（紅葉）
わらぢ（草鞋）
なめくぢ（蛞蝓）
ちぢむ（縮）

ず

少數ノずヲ語記スベシ。左記ノ外ハづヲ用フ。

ずず（數珠）
ずみ（栂）
ずわえ（條）
あんず（杏子）

ゆず（柚子）
いしずゑ（礎）
こずゑ（梢）
かず（數）
きず（傷・疵・瑕）
くず（葛）
すず（鈴）
すず（錫）

すずき（鱸）
すずし（生絹）
すずしろ（蘿蔔）
すずな（菘）
すずめ（雀）
すずり（硯）
ねずみ（鼠）
はず（筈）

ゑはず（弭）
はずみ（機）
みみず（蚯蚓）
もず（百舌鳥・鵙）
ずす（誦）
たたずむ（佇）
なずらふ（準）
ひずむ（歪）

まず（雜・交・混）
ずるし（狡猾）
すずし（涼し）
かならず（必）
すずろ（漫）

さ行變格活用ノ濁レルモノ。例ヘバ、禁ず・信ず・論ず

文部省檢定濟

昭和八年十二月二十七日　中學校國語漢文科用
昭和九年一月二十九日　實業學校國語科用

昭和八年八月一日印刷
昭和八年八月五日發行
昭和八年十二月十八日訂正再版印刷
昭和八年十二月廿一日訂正再版發行

最新國文讀本（全十冊）

定價各金六拾錢

編者　佐佐木信綱
編者　武田祐吉
發行者　東京市神田區錦町三丁目十一番地　湯川松次郎
印刷者　大阪市西區阿波座中通二丁目四番地　井下精一郎

發行所　東京市神田區錦町三丁目十一番地
大阪市南區順慶町一丁目五十三番地　湯川弘文社